

卒業論文

「宮澤賢治文学から見る現代国語教育と国語科と文学の境界」

早稲田大学教育学部国語国文学科

IE14E144- 1      山口 駿

## 目次

1. はじめに
2. 調査対象
3. 「やまなし」
  3. (1) 「やまなし」の概要
  3. (2) 表現と対比を主軸にした「やまなし」の指導目標
  3. (3) 生命観という主題
  3. (4) 造語の作る世界に対するアプローチ
4. 「注文の多い料理店」
  4. (1) 「注文の多い料理店」の概要
  4. (2) キャラクター相関と場面把握という目標
  4. (3) 境界に位置する者と多角的に見られる対立構造
  4. (4) 多方向から味わえる作品の授業化の難しさ
5. 「雪わたり」
  5. (1) 「雪わたり」の概要
  5. (2) 優れた情景描写と明快な展開に対する指導目標
  5. (3) 人間と狐の境界
  5. (4) 作品へのアプローチ方法を身につけるために

6. 「オツベルと象」

6. (1) 「オツベルと象」の概要

6. (2) 中学国語へとステップアップした賢治文学

6. (3) 構造把握と主題―「寂しい」笑いを軸にして―

6. (4) 多様な解釈を生むのは良い教材か

7. 「自由に読む」という現代国語教育の育成方針

8. 文学と国語科、賢治文学を通して考える

9. 終わりに

## 1. はじめに

私は、塾講師の経験がある。そこで感じるのは、国語科という科目を教えるのが、他のどの科目を教えることよりも難しいということだ。主要五科目に関しては、英語も数学（算数）も理科も社会も、基本的な知識を身につけ、例題を解き、問題演習を重ねることによって学力を高めていく。そして、試験当日になると過去に解いた問題と数字や単語だけがすり替えられたような類題に出会い、経験値を活かして正答を導いてゆく。一部の例外を除けば、ほぼすべての生徒たちはこのような流れで学力を伸ばしていくのではないだろうか。しかし、国語科に関しては、この類題という考え方がほぼ適用できない、あるいは、解答へのプロセスを導き出すことが他教科と比べて非常にハードルが高いようである。近年の大学入試センター試験を見ても、試験問題評価委員会報告書には、問題文の読みにくさや正答選択肢と誤答選択肢の差が明確でないことなどから、批判の声が上がることもある。このことから、国語科という教材を扱うことの難しさがうかがえる。

では、その国語科の力を高めるために学校教育の現場ではどのような指導を行っているのだろうか。本論文では、その基礎となる義務教育の場である小学校・中学校での宮澤賢治作品を扱い、その教材としての扱われ方を論じ、これらの作品によってどのような力を伸ばせるのか、その現状と可能性を示し、果ては教科書採用作品としてふさわしいものなのかといった点で論をまとめていきたい。多数ある採用作品の中でも特に宮澤賢治作品を選んだ理由としては、特にその優れた情景描写と独特な感性から紡ぎ出される世界が素晴らしくもあり、しかし、時には難解だと解釈されうることから、先述の国語科という科目を扱う難しさに結

びつくのではないかと考えたからである。

## 2. 調査対象

先行研究を除き、本論文の調査対象とする作品・教材は以下の通りである。

### 小学校教科書

「やまなし」『国語 6 創造』光村図書 2015

「イーハトーヴの夢」『国語 6 創造』光村図書 2015

「やまなし」『みんなと学ぶ小学校国語 五年 上』学校図書 2015

（巻末に掲載されている副教材的扱いであるが、具体的な指導案等が記されているため、今回の研究対象とする）

「注文の多い料理店」『みんなと学ぶ小学校国語 五年 上』学校図書 2015

「注文の多い料理店」『新編 新しい国語 五』東京書籍 2015

「雪わたり」『小学生の国語 6年』三省堂 2015

「雪わたり」『ひろがる言葉 小学国語 5 下』教育出版 2015

### 中学校教科書

「注文の多い料理店」『現代の国語 1』三省堂 2016（これも副教材的扱いではあるが、学校図書版「やまなし」同様に研究対象とする）

「オツベルと象」『伝え合う言葉 中学国語 1』教育出版 2016

教科書は現行のものが資料として参考にできたが、学習指導書や研究書に関しては、現行のものの入手ができなかったものなどもあるため、手に入るものの中で最新のものを参考文献として使用した。また、各資料

については、巻末に掲載したため、参照してほしい。

### 3. 「やまなし」

#### 3. (1) 「やまなし」の概要

「やまなし」は、大正十二年（一九二三年）四月八日に、『岩手毎日新聞』において発表されたものが初出である。そこから、一九七一年発行の『小学新国語 六年 上』（光村図書出版）に初めて採用されて以来、今日まで四十年以上にわたって、小学校の国語科教材として用いられている。

この作品は、大きく分けて二つの場面（テキスト上では「二枚の青い幻灯」と表現されている）からなっている。一つ目は、「五月」と題された、カニの兄弟たちが魚とそれを食らうカワセミを目にする場面である。二つ目は、「十二月」と題された、カニの兄弟たちが大きく成長し、やまなしを目にする場面である。このように、場面が二分されていることから、先行研究においても「五月」、「十二月」の二枚の幻灯をそれぞれ対比・並列させて論じていることが主流となっており、教科書における指導案においてもその例に漏れない。

この作品の特徴は、何と言っても特徴的な造語の数々である。「ゆらゆら」、「サラサラ」といった聞きなれた表現と並んで、「トブン」、「かぷかぷ笑ったよ」、「つぶつぶ暗いあわ」といった、筆者独自のものと思われるオノマトペ、さらには、「クラムボン」や「イサド」という造語も描かれている。ストーリー構成についても、カニの兄弟たちの日常の会話のワンシーンを切り取ったものと言うべき内容で、いわゆる童話や物語に

多く見られる起承転結の形を持たない。また、メインキャラクターはカニであるのに、タイトルは終盤に少し顔をみせるだけの「やまなし」であること、父はいるのに母カニがいないことなどから、教材の中でもクセのある、難教材としてその名が知られている。こうした、特徴的な教材を、教育という観点から見てどのように扱っているのかを見ていきたい。

### 3. (2)表現と対比を主軸にした「やまなし」の指導目標

国語科教科書には、その教材によって養いたい能力を表す、指導目標が教科書ごとに設定されている。これはいわば、各出版社が教育現場に望んでいる児童・生徒の育成方針である。本論文では、この項目を比較・分析することで、「やまなし」の現状とこれからの可能性を論じていく。各教科書における指導目標は巻末に記載した通りである。

これらのデータを見ると、光村図書版と学校図書版の双方において、ほとんどの部分が同じような指導目標を掲げている。その共通点は、朗読を用いた教育を推奨している点、オノマトペなどの独特な表現を味わわせる点、五月と十二月をそれぞれ対比させて読ませる点、そして生命感について考えさせる点の四点に大きく分けられるだろう。特に、後者の三点に関連するものとして、外館克裕氏が『「やまなし」アンケート単純集計・考察（第一次）―作品解釈の多様性を中心に―』『国語教育研究岩手』（日本国語教育学会岩手支部会 1991/06）の中で、岩手県内の小中高校教員470名に対して行ったアンケートの結果に基づき、最もスタンダードな授業の型を示し、以下のように述べている。

【「表現やイメージの面白さを理解する」事を第一の目標とし、「五月（かわせみ）」と「十二月（やまなし）」との〈並列〉の対比を

行って「生と死との対比」を主題にする、音読と討論による8、9  
時間の授業」という事になる。

当たり前の事かもしれないが、童話や物語において、授業で求められるものは、主題である。その主題を話の軸というマクロ的視点から理解したうえで、表現の良し悪しといったミクロ的視点へと読みを深めていくのが一般的ではないだろうか。では、「やまなし」の持つ主題とは一体どういったものであるのか。それを考えていく。

### 3. (3)生命観という主題

「やまなし」だけにとどまらず、宮澤賢治の童話には、動物が非常にたくさん登場する。それも、人間からの視点で見る客体としての動物ではなく、言語を扱うなどといった能力を身につけた、ある意味では人間化しているとも言える、主体性を持った動物を、擬人法を用いて描くことが多い。現段階で教科書に採用されている宮澤賢治童話は、すべてがそう言った主体としての人間的動物が登場する。

この作品では、カニの親子たちの視点で物語は語られる。我々が普段目線を落としてみている水面の揺れは、彼らにとっては天井として表現され、恐怖の感情も、単なる身の危険ではなく、被捕食者としての命の危険を感じるものとなっている。これは、人間という枠組みに縛られず世界を見ることがのできる宮澤賢治独特の世界観と叙述能力と言えるであろうし、普段とは違った視点で物事を考える思考力を養ってくれるという点で教育的見地から言っても非常に有用な教材であるといえよう。しかし、その肝心の内容というのは、いささか単純明快であるとはいえないであろう。先述した通り、起承転結がほとんどなく、語彙が独特であ

り、母カニの不在や宮澤賢治による造語など、謎もまた多い。そこからどのように主題を探っていけば良いのか。この基本的な姿勢については、恩田逸夫氏が「賢治童話の読み方―『やまなし』を中心に―」『解釈』（解枳学会 1971/03）の中で、様々な主題をめぐる研究の下地となる見地を次のように述べている。

創作の主眼は二つのパートの対比照応のなかにもとめられるはずで、第一部のなかにすでに〈豊麗な初夏における冷厳な死〉という二つの相反的要素の照応があるがそれが第二部の〈静寂な初冬における豊穰な生〉と組み合わせられている。ものごとは決して一面的ではなく、相反的二面要素の照応結合がその真の姿であることを示そうとしたのであろうか。

この分析は「やまなし」の構造を示し、そこから我々が読み取れるものを端的に示していると言える。<sup>A・B</sup>光村版教科書にも言及されていたように、一般的に考えれば、五月は生命にとっては明るく動きのある季節であり、一方で、十二月は生命にとっては冬眠を迎えるなど静かで暗いイメージを持つだろう。しかし、本文の内容は、五月にカニの兄弟たちが恐怖を感じるという暗い内容で、十二月にやまなしの豊かさを感じる明るい内容となっており、一般的見地とのずらしが図られている。そこには一体どのような意図があるのか、そこにこそ主題を見つけられるのではないだろうか。これに関して、関口安義氏は、「やまなし（初期系）―寓意を読む」『国文学 解釈と鑑賞』（至文堂 2009/6）において、隠れたテーマについてこう語る。

ここには寓意が内包されている。それは人生の不思議さ、やり切れなさ、別言すれば生存悪・原罪の問題と見えようか。それは賢治のテクストの多くがかかえるものと重なる。（中略）邪心のない小さな

生き物が、活発に泳ぎまくる魚にやられる、魚は美しい姿のかわせみに捕食される。他方、木から谷川に落ちたやまなしは、蟹に食べられる。こうした自然界の摂理が、本作には内包されているのである。

やはりここでも、「やまなし」を通して、動物・生物をどのように見るかという生命観が主題として挙げられている。ここで季節のイメージと叙述内容におけるずれについて考えてみると、関口氏の言うように、「やまなし」には、ある種残酷とも捉えられうるような、自然の摂理というのが押し出されているのかもしれない。このことは、<sup>A・a</sup> 光村図書・<sup>A・b</sup> 学校図書ともに取り扱っており、授業における主題として扱うにもふさわしいテーマかもしれない。

しかし、ここで問題となるのは、命のやり取りをしているのが「カワセミ―魚」だけではないという点である。この生命に関するテーマにおいて、この二つ以外にも明確にその体験を経ている存在がある。それが、クラムボンである。彼は、もしくはそれは、いったい何者であるのかがテキスト中からは想像できない。さらに言えば、<sup>A・b</sup> 光村図書版教科書においては、「この正体について、時間をかけることは避けたい」と明言している。やはり、この作品を読むにあたって、クラムボンはいったい何であるのだろうかといった疑問はついて離れないものである。テキストを見てもわからないことなのだから、作品論から作家論へと切り替えていくきっかけとして、宮澤賢治の伝記である畑山博氏の「イーハトーヴの夢」を資料教材として扱うことの狙いが読み取れる。<sup>A・b</sup> 光村図書版教科書の指導書にも、「▽賢治の生き方を読むことにより、「やまなし」の世界に何が息づいているかを考えさせたい」とある。しかし、その内容は良くも悪くも賢治の年表的な伝記に過ぎず、テキストだけからでも論

じられるような、様々な視点から語る「生命観」という主題へと導くための説明・手助けとなっているにすぎない。造語に対する言及も、地名を岩手県に重ねたことのみである。事実として、学校図書版教科書においては、「イーハトーヴの夢」は掲載されていない。こうした主題とそれに付随する形で残るすっきりとしない謎を抱える「やまなし」を教材化する意義はどこに・どのような形であるのだろうか。

### 3. (4) 造語の作る世界に対するアプローチ

改めて、教科書においてこの作品を用いて養っていききたい力とは何であろうか。今までの情報とそれに対する論から考えるに、それは【独特な表現を味わうことのできる力】、【主題としての生命観を理解する力】、【作品から作家へと視点を移して考える力】の三点にまとめられるのではないだろうか。作品中に登場するキャラクターたちの「気持ちを考える」というスタンスから、この作品に込められた「気持ちを考える」というスタンスへと立場を変える機会というのは文学作品を味わっていく上で非常に大切なものだということは言うまでもない。その役割をこの「やまなし」は国語教科書中で果たしているのだろう。岩田英作氏は、「宮沢賢治『やまなし』の授業化とその意義」『国語教育論集』（島根大学教育学部国文学会 2016/02）において、授業化の意義を次のように述べている。

行間を読む行為、空所を読む行為は、物語の読書にはむしろ付き物である。『やまなし』が他の物語と比べて特徴的なのは、書かれざる物語を想像力によって紡ぎ出す行為をより明瞭に自覚しやすいところにある。目の前に新しい世界が広がるような思いを持って、物語

を読むってこういうことなんだと子どもたちが感じてくれること。

『やまなし』の授業化の意義は、まさにそこにある。

つまり岩田氏は、情報がないことに対して、自身の想像力によって物語を補完すること。受動的な「読む」行為を、能動的な「読む」行為へと変えることが物語を読むことであり、それを知ってもらうことこそがこの作品を授業化する意義であると述べている。この考え方は、児童たちの想像力、思考力を養う目的に対して理想的なものであると言える。文学作品に関する論争というものは絶えず行われており、何が正解であるのかという点においては、答えなどそもそも存在しないものの方が多いかもしれない。これはつまり、文学作品を受容する際に、自身の能動的な「読む」行為によって作り出される世界は、文脈によって破綻しない限り、自由であるということに繋がってくるだろう。「やまなし」の抱える謎も謎のままでもよく、各々の持つイメージを自由に許容することが大切なのである。

しかし、そう考えると、この意義と教科書（特に A・a 光村図書版）との間に食い違いが起きるのではないだろうか。まず、教室単位でテキストを読んで、「生命観」という主題に沿って物語を味わっていく。その中で、言及されない情報に関しては、自身の想像の元で創造される。この幻想的な世界観における解釈というのは、人によって様々なものであることは創造に難くない。カニたちのいる場所はどこなのだろうか。なぜ母カニはいないのだろうか。「イサド」とはどこなのだろうか。「クラムボン」とは生き物なのか、それとも泡などといった無生物なのだろうか。そうした疑問に自分なりの答えを出したところで、資料として宮澤賢治のルーツを示される。これは、自由な作品解釈を妨げるものになりうるのではないだろうか。なぜなら、テキストだけで補完していた読者自身の世

界観は、作者の詳細な情報によって壊れ、宮澤賢治に関連した情景世界であると認識を限定させてしまう恐れがあるからだ。せっかく宮澤賢治が実在しない造語による地名で舞台を演出したとしても、これでは発想の自由が制限されてしまう。作品論から作家論へと移行する足がかりにするには、「やまなし」はその作品の性質においてあまり適切ではないのではないだろうか。私小説などの分かりやすいジャンルが確固として存在している以上、この作品にこだわらずとも、指導目標を達成するために、教える側が導きやすく適切な教材があるのではないだろうか。

#### 4. 「注文の多い料理店」

##### 4. (1) 「注文の多い料理店」の概要

「注文の多い料理店」は、一九二四年に発表された宮澤賢治の短編集の中の一つである。「どんぐりと山猫」や「鳥の北斗七星」などと同時収録されている。この短編集は、宮澤賢治の自主出版の形をとって販売されたにも関わらず、高価な値段などの理由から、ほとんど売れることがなかったという。しかし、この「注文の多い料理店」は、その売り上げのみが作品の価値を決定づけているというわけではない。その内容は、大正十年代当時の社会問題に対して一石を投じるような内容になっており、さらに、その描写は一過性のものではなく、現代における我々の立場に立ってみても、人間社会と自然とが共存を図っていくうえで深く考えさせるテキストとなっている。だからこそ、当時のごく少ない売り上げや人気にもかかわらず、現代において小中学校の国語教科書で採用さ

れているのだろう。

この作品のあらすじは以下のように表せる。都会から来た二人の紳士が狩りをしに山へ行ったところ、空腹を感じ、山猫軒というレストランへと入ってしまう。そして、そこで提示される店側のルールを自分たちの都合の良いように解釈していくと、実はそれは山猫が示す罠であり、逆に自分たちが食べられそうになってひどく恐怖を覚えるという展開である。

この作品は、その内容の展開から、「都市―地方」や「人間―自然」といった二項対立や、生態系における人間の「食」やそれに関わる「生命」という倫理的な側面に訴えかける問題、そして当時の社会構造（特に西洋的な価値観）について疑問を投げかける、現実世界とファンタジー世界における異界の役割について言及するといった多角的な視野から論題を得ることのできる様々な要素を孕んだ作品として分析がなされてきた。こうした視点を持って研究しているのが現状の研究動向であるが、国語科教科書においての扱いはいかなるものなのであろうか。指導目標を中心に、その内容を次項でまとめる。

#### 4. (2) キャラクター相関と場面把握という目標

「やまなし」で取り上げたように、今回も学習指導目標のデータを整理・分析し、その傾向と狙いを探っていく。

教科書によって単元別ごとの指導目標の設定の仕様は異なる。今回扱う教科書では、授業時間ごとの小目標・評価基準などが設定されていた。これらを比較することで一貫したテーマなどを読み取れることもできると考え、巻末に掲載することにした。

『<sup>ロ</sup>学校図書版で見られる教育目標は大きく分けて五点である。一つは、「やまなし」などの他の宮澤賢治作品に関連して、表現技法やストーリーに対して関心を抱くことができる力。二つ目は、登場人物たちの叙述に注意しながら、その相関関係を理解することができる力。三つ目は、「物語の人物が答えます」ゲームを通して、自分たちが作品内のキャラクターになりきり、ロールプレイをしながら議論することによって、お互いの発言の根拠を比べ合う力。四つ目は、自身で面白いと思ったことをまとめることができる力。そして五つ目が、比喻表現などの特徴的な言葉の使い方を理解することができる力である。また、『<sup>ロ</sup>東京書籍版では、ストーリーの流れだけでなく、物語の構成、擬態語や擬声語などの表現の工夫に着目したうえで、自分の考えをまとめる力をつけること。そして、言語活動を通して物語の特徴や良さについて解説させる力をつけることを大きな目標として掲げている。また、「注文の多い料理店』『現代の国語 1』（三省堂 2016）には、作品解釈をするにあたって、

現代文明に対する反感が、自己中心的な二人の紳士に対する反感と  
いうかたちで表現された作品として解釈することができる一方で、  
二人の狩猟に対峙して描かれているように見える山猫も、隙あらば  
人を籠絡し、欲望のために命を奪おうとする存在でもあり、二人の  
紳士、山猫の双方に対して、作者の痛烈な批評意識が隠されている  
作品として読むことができる。

という方針のもとで、分析を行わせようとしている。そうした上で、描写、展開に則して挿絵を形成させたり、作品評価に関して「作品の魅力を友達に伝える」ことをさせたりすることで、この作品を分析的に読ませようという試みを行っている。

これら三つの教科書に共通して言えることは、ストーリーを追って登

場人物の心情について考えるということだけでなく、そこに置かれたキャラクターたちの相関という物語の構成を考えさせようとしているのだ。そして、作品に対して抱いた自身の感想や考えを相手に伝えるアウトプット力を鍛えさせようとしていることであろうか。また、学校図書版と東京書籍版を比較すると、前者は設定されている目標である、「山に狩りに来た二人の紳士の言動から、紳士の自然や生き物に対する考えを読み取ることができる」「料理店に入った紳士が、注文を読みながら次第に食べられることに気付いていく様子を読み取ることができる」「二人の紳士の顔がくしゃくしゃになってもとに戻らない様子を読み取ることができる」といった内容から、キャラクターに対してスポットを当て、彼らに対してなされている描写から作品を味わうような方法をとっている。そのため、「物語の人物が答えます」ゲームという関連学習へとつながっているのだと考えられる。一方で、後者は「物語の構成や出来事の流れを押さえる」「物語の構成の工夫や戸の言葉のふた通りの意味などの表現の工夫に気付いている」という目標を掲げたり、教材の特徴として「現実の世界↑不思議な世界↑現実の世界という構成である」「二通りの意味に取れる言葉が用いられ」たりしていることが、物語全体の大きな仕掛けとなっていると述べられていることから、場面転換やそのきっかけとなるものへのアプローチを意識させる構成となっていることがわかる。こうした違いを踏まえたうえで、この作品の主題と照らし合わせ、教材としての意義を探っていききたい。

#### 4. (3)境界に位置する者と多角的に見られる対立構造

「やまなし」では、様々な形から語られる生命観という考え方を軸に

物語は語られていた。この作品においても、「紳士」「山猫」「犬」「猟師」といった、その社会的（都会と自然という点において）な立場を異にするキャラクターたちが登場することから、一面的な解釈だけにとどまるというのは好ましくないだろう。

<sup>B-1</sup>『学校図書館版』においては、「注文の多い料理店」におけるその主題について、このように述べられている。

動物を殺すことを何とも思っていなかった二人の若い紳士が、いつの間にか逆に動物に殺されようとしていたおかしさと不気味さ。さらにそこに込められた、動物の命を何とも思っていない、傲慢で我儘な人間に対する警告。

また、<sup>B-2</sup>『東京書籍版』では、「教材と児童との関わり」として、

児童は、自分の犬の命を「・・・円の損害だ。」とお金の価値でしかとらえない二人の紳士の考え方や人柄に、反感を抱きながら読み進めていくだろう。そして、そのような二人の紳士が、戸の言葉を都合のいいように解釈して山猫の巧妙な罠にかかっていき、自分たちの身につけている、いわゆる「文明」を一つ一つはぎ取られていく展開に、知らず知らずのうちに引き込まれていくと考えられる。

この物語は、会話文から人物の性格や心情の変化をつかみやすく、また、人間が自然に仕返しされるといふ展開は児童にとって理解しやすい。紳士たちの言動と山猫の「注文」とを対比させながら読むことで、主題に迫れると考える。読解にあたっては、ファンタジー独特の表現の良さにも気づかせながら、想像力を広げさせたい。

と述べられている。このことから、どちらも人間的な、いわば自然に対する開発的な考え方を批判することを主題に置いていると考えられる。

その中でも、<sup>B-3</sup>『学校図書館版』では、その物語の流れをユーモラスかつ不気

味なものとしていること。<sup>B・D</sup>東京書籍版では、紳士たちと山猫との言動を対比させることに重点を置いていることから、先述したように、やはり前者はキャラクターとそこに降りかかるものを重点的に、後者は物語の展開のカギとなるものを重点的に扱っているようである。一方で、副教材として採用されている三省堂版教科書は、「注文の多い料理店」<sup>4</sup>。(2)で引用したように、人だけではなく、山猫に対しても欲望深き者として痛烈に批判しているというさらなる解釈が加えられている。

全てにおいて見られるのが紳士と山猫との対立であるが、その対立を通してどのようなことが見えてくるのか。安藤恭子氏は、「注文の多い料理店・再構造化の戦略」『国文学 解釈と鑑賞』（至文堂 2009/06）において、各キャラクターの置かれた立場を対比させ、分析を行っている。安藤氏は以下のように述べている。猟師―山猫の関係は、「狩りをするもの／狩られるもの」という敵対関係として見やすい」としつつも、「この二者は地方に属するという点では同族」である。猟師―紳士の関係は、「対「山猫」関係では同族だが、〈都会―地方・自然〉という構図の中では敵対関係」である。こうした交錯した人物関係の中で、「紳士―山猫」の両項に同族と敵対の二つの関係をもつ「猟師」は、登場人物を構造化する上で非常に重要な人物であると指摘している。猟師は、地方という山猫側の領域に住み、都会の象徴である紳士側に立って行動している。こうした境界に位置する猟師の位置付けを、安藤氏は「権力の代行者としての役割も担っている」と定義した上で、「紳士」に「団子」を与えることで、「猟師」はその地方性をあらわにし、また、欲望の象徴でもある〈食〉において「紳士」との対立関係をもあらわにし、「紳士」を批評する視座ともなっている」と、紳士に支配されながら紳士を批評する混成性を持った登場人物であると評している。

同様に、人間以外の動物という属性を持ちながら、紳士側に立って行動している混成性を持ったキャラクターとして紹介しているのが、犬である。このことについて安藤氏は、「**「猟師」と「犬」は、「紳士」と「山猫」の二項を関係付けながら、境界領域にあつて両者を相対化する**」「**再構造化を可能にする重要なファクター**」であると評している。このような都会ー地方・自然という二項対立的な世界観における登場人物たちの性質によるずらしは、この作品における重要な特徴であり、ずらしと言う概念は、宮澤賢治童話において重要な役割を果たす考え方であると言つてよいだろう。

このずらしの考え方は、登場人物の性質のみにおいて当てはまるものではない。言葉の解釈の違い・ずらしというものも、この作品を構成する主要な要素なのである。山猫は、館へと入ってきた紳士たちに対して、様々な注文をする。これは、結末から逆算するに、山猫が紳士たちを美味しくいただくための要求であるのだが、紳士たちはそれらを全て自分たちの都合の良いように解釈することしかない。ただ、一方的に紳士たちが愚かであるというわけではないことが、友田義行氏は「山猫たちの経営戦略」宮澤賢治「注文の多い料理店」論『信大国語教育』（信大国語教育学会 2014）にて述べられている。

「すっかりイギリスの兵隊のかたち」（二八）をしていることから、彼らの趣味趣向を把握しているのだ。西洋かぶれの彼らをより強く引き付ける料理店は、西洋風でなければならなかった。山奥に西洋建築が突如現れたにも関わらず警戒できなかった要因には、紳士の愚昧さだけでなく、山猫の見事な手腕も手伝っているのである。

このように、物語におけるずらしの発生には、紳士たちの無能さによるものだけではなく、山猫の有能さによる部分も大きいと評価している。

こうした観点から考えると、「注文の多い料理店」における主題の把握には、キャラクターの性質にも表れているように、都会ー地方・自然の対立というものは重要になってくることは間違いない。そういった中で彼らの描かれ方を見ると、都会側である紳士たちは「決してご遠慮はありません」と書かれた看板を「ただでごちそうする」と思い込むことを筆頭に、自己中心的な行いをする愚者として、山猫はそういった都会からの使者に鉄槌を下す者として、そしてその中間に位置する猟師と犬はそれぞれ不思議な世界と現世とをつなぐ者として位置している。この作品の基本的な筋書きとしては、都会の属性を持った者が地方・自然の者たちにしっぺ返しを食らうという二項対立が見えてくるだろう。しかしそうした中で、欲望の赴くままに行動しているのが紳士だけではなく、山猫もその食欲を満たすという欲望を満たすために罌を仕掛けていることも見えてくるだろう。一方で、中間層である猟師、犬はどういうわけか最後になって元気な姿で紳士に安堵感を与えている。これは、利益を追い求める社会構造の象徴である都会が地方・自然を支配できないことを示すとともに、地方・自然の側にも闇が潜んでいるという、妄信的なロマン主義崇拜の批判も同時に行っているといえよう。そうした観点から、バランスーとしての境界層・中間層というものの捉え方の重要性を強く押し出した作品なのではないだろうか。

#### 4. (4)多方向から味わえる作品の授業化の難しさ

この教材において際立った特徴は、【紳士と山猫の二項から見る戸の言葉の意味の違い】、【紳士の心情の変化】、【異界と現実世界との場面転換】の三つではないかと考えられる。特に一つ目のような教材の特徴をつか

んでいく上で重要なのは、両者の視点を持つことである。

この考え方を実践するにあたって、阿部藤子氏は、著書「部分の読み」と「全体を俯瞰する読み」に書くことを生かす(2)、「注文の多い料理店」の実践から」『全国大学教育発表要旨集』（全国大学国語教育学会2014）において、小学五年生に対して実際に行った授業の報告をしている。その主な内容は、「戸に書かれたことばと、紳士の解釈や心情、本当の戸の意味を読む」活動をワークシートに書き込んだり、「自分たちが食べられるとわかってからの山猫の会話を想像」し、「犬が現れてから現実に戻った場面の山猫の会話劇をつくり発表」するといった、シナリオ作成をしたりする活動である。ここでの自分たちというのは、紳士たちのことである。この授業の趣旨は、部分の読みに特化した従来の授業形態から、俯瞰した読みへと昇華させるために一覧表を作成させることである。すると、この授業を通して、児童たちは戸の言葉を通して、紳士たちの視点と山猫の視点を同時に獲得し、言葉の上で生じている食い違いの面白さを味わうことができたという。また、こうした一覧表のおかげで、山猫や紳士たちの矛盾（ただで食べるつもりなのに会計の心配をしている、結局脱ぐことになるのに靴の泥を落とさせるなど）に気づくことができたそうだ。こうした理解は、初めから気づいていたのではなく、ワークシートを完成させていくに従って解釈が深まっていったのだと阿部氏は述べている。

こういった多角的な視点から読みを深め、事象を整理しながら読み進めていく活動は、童話だけでなく小説や評論といった文学作品を讀んでいくにあたって、読みの基礎となる考え方を育てることのできる有意義な活動になるだろう。しかし、気になる点が二つある。まず一つは、この授業をするにあたって要した時間が、十三時間であることだ。これは、

一般的な授業時間よりも多く、指導案によっては二倍以上の時間を取ってしまうこともある。二つ目は、この授業において被験者となった児童たちは、有名国立大学付属の小学校の生徒たちであることである。彼らの学力や授業への取り組みの姿勢、理解度といったレベルが、果たして義務教育課程の小学生の多くに対して一般化しうるものなのかということに疑問を感じざるをえない。さらに、この授業においては、せっかく彼らが気づいた矛盾に対してさらなる議論をなされたという報告がない。これは、児童たちにとっては不完全燃焼で終わってしまったと言えるだろう。そういった点を踏まえると、一つ目に挙げた必要授業時間も、よりスケジュールを圧迫するものになってしまうのではないだろうか。

「注文の多い料理店」は、戸の言葉の意味を中心に据えることで、様々な読みを深めることが可能な教材であることはわかった。そしてそういった読みをできることが、この作品の持つ物語の構成や表現の工夫であろう。しかし、そのようなレベルに到達するためには、たくさん時間と高いレベルでの思考力を要する教材であるとも言える。俯瞰的な読みをはじめとする、文章に対する多様な視点を養うのであれば、もう少し文章量が少ないものであったり、より現代的で平易に描かれたりした作品の方が、多くの生徒たちに一般化が可能かもしれない。逆に、そうした視野を養うことを放棄し、教材として扱うのであるとすれば、それはこの作品の良さを味わっているとは言えないのではないだろうか。

## 5. 「雪わたり」

## 5. (1) 「雪わたり」の概要

「雪わたり」は、大正十年（一九二一年）から『愛国婦人』誌に掲載された、賢治のデビュー作とされている。一九九四年には、株式会社マジックバスによってアニメ映画化されているなど、その美しい光景に定評のある作品である。

「雪わたり」のストーリーは次のような流れで展開される。

美しい雪野原を見渡した地域に住む人間の子どもである四郎とかん子は、雪の野原で狐をからかうような歌を歌っていると、本当に狐の子ども、紺三郎に出くわしてしまう。そこで狐は二人にきびの団子を上げようとするが、それを四郎は「狐の団子はうさのくそ」と馬鹿にする。それに対して紺三郎は騙すのは狐ではなく人間の大人だ、それを説明するから幻灯会に来るようにと二人を招待する。その後、二人は兄達にそのことを説明すると、お土産を持っていけと背中を押された。そして幻灯会へと参加すると、紺三郎が司会を務めている姿に二人は感心しながら、催しが始まる。中休みになり、狐の女の子が二人に団子を進めると、初め食べるのをためらい、気まずい雰囲気があったが、四郎は狐が嘘をつくはずもないと思い、二人はそれを平らげた。するとその団子は美味しいものであり、狐達も二人から信用してもらったことに歌を歌って喜んだ。やがて幻灯会は後半へと差し掛かり、紺三郎は二人の信用を勝ち取ったことにより、自分たちの誠実さゆえに、「私どもきつねの今までの悪い評判をすっかりなくしてしまうだろう」と閉会の辞を述べ、幻灯会は閉幕する。そして四郎とかん子の兄たちが迎えに来たことで物語が終わる。

この作品の特徴は、その美しい情景描写であろうか。私は雪国育ちではないが、雪が凍って固い大地になっている様や木々が凍りついている

様が、そのイメージに反して温かみを持って伝えられていることが豊かに想像させられる。アニメ映画化という試みも、映像を想起させることに優れているから企画実行に至ったと考えられる。そのストーリーも非常に分かりやすい。子どもという純粋な心を持ったもの同士のふれあいで、人間が一方的に抱いていた狐への不信感を狐達は悲しみ、その認識を改めてもらおうと幻灯会を開き、その心に人間の子どもである四郎とかん子は見事に応え、両種のわだかまりをなくすことに成功するのだ。不穏な存在もなく、軋轢や対立といったものは存在しない。教材化されている他の賢治作品と比べても、終始明るい調子で描かれる特徴的な作品と言えるかもしれない。こうした特色をどのように教材として扱っていくのかを考えていく。

#### 5. (2) 優れた情景描写と明快な展開に対する指導目標

この作品を教材として取り扱っていく中でまず特徴的なのが、配当時間の少なさである。他の賢治作品であれば、十時間近くかけて読むものもあるのに対し、「雪わたり」の読みに費やす時間は三省堂版、C・B 教育出版版ともに四時間ほどで、短くまとまっている。また、両教科書に共通しているのは、言語活動としてこの作品を、本を推薦する活動のきっかけとして行うことである。つまり、物語の作品解釈を短い時間で行い、それを他者にアウトプットさせることに重きを置いている教材と云ってよいだろう。そのような作品解釈を行っていく上で重要となる点を、評価基準をもとに見ていきたい。

「雪わたり」を読んでいくにあたって、三省堂版で明記されている評価基準は、「教材文のおもしろいところを見つけ、興味をもって読んで

いる」「四郎やかん子どのように紺三郎と仲よくなっていくのかを考えながら音読している」「きつねたちが躍り上がるほど喜んだわけを、叙述をもとに考えている」「話しあったことをもとに音読で読みを確かめている」「様子がわかるように工夫して音読している」「宮澤賢治の他の作品を読み、話のおもしろさが伝わるように文章に書いている」となっている。

一方で〇〇教育出版版は、時限ごとの評価基準が同様に書いてあるわけではないが、大きな到達目標として「表現の工夫をとおして、『雪わたり』のおもしろさを発表しようとしている」「情景描写や、登場人物の行動や気持ちなど、表現の工夫をとおして、『雪わたり』のおもしろさを読んでいる」「比喻や反復などの表現の工夫に気づいたり、語感、言葉の使い方について気をつけたりしている」などを掲げている。これは、両者共通する部分が多いため、ほぼ同様の視座で進められていると考えてよいだろう。しかし、授業の指導案を見ると、〇〇教育出版版はより具体的な指導例を挙げ、表現の工夫や登場人物の性格について、ノートにまとめさせる方針を勧めている。

共通するところの多い両者であるが、その違いを挙げるならば〇〇三省堂版は展開を整理しながら、なぜそのような展開になるのか原因を考えながら読ませようという意図が伝わってくる。一方で〇〇教育出版版に関しては、展開の整理についてはあまり言及せず、その叙述の面白さを抽出させたり、登場人物にフォーカスを当てたりすることを目的としているようである。求められている知識としては、〇〇三省堂版の方が因果関係を考慮したストーリーの整理・キャラクター像の把握など俯瞰的な視野で読むことを求められているため、その水準が高いように思われる。その理由は、扱う学年が六年生と五年生とで異なっていることと関係しているのかもしれない。

## 5. (3)人間と狐の境界

この作品は、子どもが狐の生活に触れ、また、狐が人間の心に触れ、話が展開している。そういった展開であるがゆえに、多くの研究者がこの作品を異界へと入り込むファンタジー作品であると評価している。例えば藤田晴央氏は著書「宮澤賢治、異界への入り込み」『雪わたり』におけるわらべ歌の力」『東北女子大学紀要』（東北女子短期大学紀要編集委員会 2017）において、

いくつかのファンタジーや童話において、私たちは現実から非現実の世界へ、日常から異界へと入って行く。異界において、登場人物達の意識下の心が試されたり、現実では起こりえないことにも遭遇し、精神的な試練を経験する。そして、多くの童話では、無事、日常へと帰還する。そこには登場人物の精神的な成長が描かれている。

この異界への移行は、往々にして特定の場所を経ることによって実現される。

と述べ、その異界へと入りこむ鍵となるのが、特定の場所ではなく「集落と森の間にある雪が大理石のように堅く凍った雪原」と「四郎とかんと狐によって唱和された「わらべ歌」であると解釈している。また藤田氏は、わらべ歌には「遊びの意匠に託されながら、人と人を結ぶ言霊がある」として、子供達から発せられる歌の力について言及した。一方で、高橋幸紀氏も「『雪渡り』の授業を考える」『国語論集』（北海道教育大学 2015）においてこの作品のファンタジー性について言及している。高橋氏は雪が堅くなった雪原というこの日を〈特別な日〉として、「雪の表面が固く凍るわずかな時間のみ異世界への移動は許される」と、藤田

氏と同様に異界へと入り込む際の時間的な制約について述べている。こうした、異界というキーワードを中心に繰り広げられる世界観において、「雪わたり」の主題をどのようにとらえていくのかを考えていきたい。

この作品の世界では、「きつねは人をだます」という考え方が四郎とかん子に浸透していることから、どうやら狐と人間との間に確執が生まれているようである。そのため、化かされないように「大人のきつねに会ったら、急いで目をつぶる」のだろう。しかしながら、その問題の大きさはそれほど深刻ではない。なぜなら、紺三郎が四郎とかん子をきつね小学校に招待した際に、二人は拒絶することもなく、彼らの兄たちも引き止めることをしなかったからだ。一方で狐達はどのように考えているかというと、「あなた方のような立派なお方」と呼んだり、人間に対して仰々しいまでの敬語を使ったりしているうえ、人間に対して嫌悪感を感じさせる発言はしていない。そのため、偏見というのは人間から狐達に対する一方的なものであると読み取れる。それどころか、紺三郎がしかの子を小馬鹿にする描写と対比させると、狐は人間に対して敬意を抱いていると言えるだろう。高橋氏はこの関係を「人間上位、狐下位」の関係と定義づけ、その認識が一般化した世界だと述べている。そうした認識があっても、子どもになら自分たちの主張を受け入れてもらえるのではないかという期待が狐たちにはあったのだろう。その期待の表れとして、信頼を推し量る道具として使用したのが団子である。高橋氏は、この狐からの「食」を受け入れることこそが「恩」なのであり、そこから、「この日の出来事は紺三郎ら子狐たちにとっては記念すべき〈出発点〉なのかもしれない」と、この世界の明るい先行きについて論じている。

この食というきっかけは、特に日本においては重要なファクターとして取り上げられることが多い。それは、三大欲求の一つであるというだ

けではなく、『古事記』においてイザナミが黄泉の国の一員となることを決定付けた、「黄泉竈食ひ」の信仰とも重なる。黄泉竈食ひとは、死者の世界の料理を食べてしまうと、もう現世には戻れないという信仰であるが、「雪わたり」では、その死者の世界というものを狐の世界と重ねて捉え、自分たちが狐達の一員になったということを端的に表していると解釈できる。すると、四郎とかん子は元の生活圏内へと戻れないということになってしまうのだろうか。高橋氏は、二人を迎えに來た兄達が黒い影として描写されていることに対して、

「黒い影」は四郎とかん子がまだ狐の世界を出ていない所、いわば境界線上で見たものであり、完全に人間界に入ってしまったえば「黒い影」は兄たちといった実態を持つことになる。この「黒い影」は狐の世界から見たものののである。「黒い影」には理解しえないものに対しては、狐たちの不気味さ、恐怖の感情が表れている。

と述べ、この世界に対していまだ問題が山積していると解釈した。

しかし、この論には前提として疑問点が二つある。一つは、そもそも狐たちから見て、人間の大人たちは不気味な存在とは考えられないことだ。それは、幻灯会において大人の人間である太右衛門と清作との交流をわらべ歌にして明るい調子で歌っていることから推察できる。もう一つは、人間の世界から見て狐の世界というのは、そもそも異界と呼ぶほどに壁がないことである。「やまなし」では、水面という境界を挟んでカニたちからすれば触れることのない世界が広がっていた。「注文の多い料理店」では、山猫に化かされたことによって見ていた西洋料理店は、騒動の後には消え、幻覚か異世界という解釈もできた。そして、次章で取り上げる「オツベルと象」では、象と人間との間に存在する種族間の隔たりというのは、オツベルの工場で働いている人間の反応からも分か

る通り、「雪わたり」のそれよりも非常に大きいため、象と人間との世界は互いに不可侵領域であると考えてもよいだろう。しかし、こう言った特徴が「雪わたり」にも当てはまるわけではない。この世界では、人間と狐は互いに意思疎通の手段を持っているという点において、犬が話すことのなかった「注文の多い料理店」とは異なっているし、人間と狐との種族間の隔たりも、事前に交流した経験があることから、「オツベルと象」の世界よりも隔絶したものではない。言うなれば、この両種の違いは異世界・異界というよりも、異文化と呼ぶ方がふさわしいだろう。そのため、「黄泉竈食ひ」的な描写も、他文化への理解という描写をするための教訓的な役割を果たしていると考えられる。また、黒い影という描写も、幻灯会が終わった時間が、「青白い雪」になるほど暗くなってしまうという時間を連想させるためのフアクターにすぎないのではないだろうか。「注文の多い料理店」でも見られた「ずらし」を作品内に散りばめることによって、偏見や先入観というものを刺激し、異種族間のわだかまりが解消された、という単純なストーリーを、一元的な解釈にとどまらせない深みのある作品へと高めていると言えるだろう。

#### 5. (4) 作品へのアプローチ方法を身につけるために

この作品で最も重要な点といえば、異種族間のわだかまりを信頼によって解消することに尽きるだろう。それに至るまでの経緯を追っていくことができれば、事後学習であるアウトプットの作業を行ううえでも非常に有用であることは間違いない。ただ、それだけではなく、この作品を特徴づけているのが、そうした物語を彩る雪国の情景描写の妙である。シンプルながらもそれだけにとどまらないこの物語を教材化する意義は

どこにあるだろうか。

まず、この作品は宮沢賢治作品という枠で見ると、オノマトペやリズムに乗せた言い回しは変わらず含まれているが、賢治の造語や言い回しが少なく、情景を連想しやすい。既知の単語や現代語に囲まれて、賢治特有の着眼点から描かれる修飾語が効果的に働き、比較的読みやすい文章となっている。この物語の単純さ、文章の理解のしやすさという点から、教材化された賢治の他作品よりも授業時間を少なく見積もっているのだろう。しかし、私はこの作品こそ、もっと時間をかけて掘り下げるべきだと考える。なぜなら、場面の展開や登場人物の心情変化などを考えるのに根拠となる記述が多く、作品を味わう姿勢を身につけるのに適した教材だと言えるからだ。こう言った読みの試みは、「注文の多い料理店」の章で紹介したが、その構成の難解さとそれに伴う時間的制約から、物語の構成を俯瞰的な視点から読むことの難しさを論じた。それならば、同様の読みの授業を「雪わたり」で実践してはどうだろうか。キャラクターの性格や叙述方法を掘り下げ、ミクロ的な視点を保ちながら、登場人物の相関を整理し、話の展開・因果関係を整理するというミクロ的な視点に広げてゆく。そうした読みの手法を伝えることができるならば、事後学習として採用されているプレゼンテーションのようなアウトプット活動にもさらなる効果と意義が見込めるだろう。現状以上の授業時間を取るだけの負荷が見込めないとされているのであれば、対象学年を下げるなどの措置をとるべきだろう。そうするだけの文学的・教育的価値が詰まった、教材として優れた文学作品であると主張したい。

## 6. 「オツベルと象」

## 6. (1)「オツベルと象」の概要

「オツベルと象」は、大正十五年（一九二六年）に、月刊誌『月曜』で掲載された作品である。この作品もまた、宮澤賢治の数少ない生前に発表された作品である。

この作品は、今誰かの眼の前で起きている出来事ではなく、「ある牛飼いが語る」という追想によって紡がれる物語である。その語りの中では、主に稲こき工場の経営者であるオツベルに焦点が当てられて話が展開している。ある日、いつものようにオツベルが工場にいると、珍しい白色の象がやってくる。従業員たちはみなおびえ、オツベルもその例に漏れなかったが、言葉たくみに白象を騙すことで、労働力として利用することに成功する。しかし、オツベルは白象をぞんざいに扱い、酷使したために、白象は「赤衣の童子」に頼み、仲間の象たちに助けを求める手紙を届けさせた。すると、仲間の象はオツベルを襲い、押しつぶしてしまった。この結末に対して白象は「寂しく笑って」小屋を出る。そして、最後に「おや、川へはいっちゃいけないったら」という文で物語は締めくくられる。（原文では「おや、■（一字不明）、川へはいっちゃいけないいたら。」であるが、本論文では生徒たちが授業中目にするのは教育出版版教科書のテキストであると考え、その不明字についての論は展開しないものとする。）

物語は大きく分けて三つに分けられており、それぞれオツベルと白象が出会う「第一日曜」、オツベルが白象をうまく利用している様子が描かれている「第二日曜」、そして、白象が境遇に耐えかねて仲間に助けを求め、オツベルが押しつぶされてしまうまでの「第五日曜」である。これ

ら全ての地の文の役割を、牛飼いという語り手が担っているということ  
は、この作品の大きな特徴であると言えるだろう。つまり、劇中劇とい  
う入れ子型の構造となっている。そして、これまでの作品同様にユーモ  
ラスな修飾語やオノマトペが多数用いられている。

このような特徴、展開を持った「オツベルと象」であるが、この作品  
を分析することでどのような主題が見えてくるのだろうか。また、そこ  
で得られたものをどのように教材へと生かしていけるのだろうか。その  
可能性を探っていききたい。

## (2) 中学国語へとステップアップした賢治文学

この教材は、教育出版版教科書において、中学校で扱う最初の文学  
教材という位置付けになっている。「オツベルと象」では、取り扱ってい  
る教科書会社が一社のみであった。そのため、出版社同士の比較という  
作業とはならないが、これまで同様の手法で分析を行い、教材としての  
意義を探っていく。

この作品は、扱うに当たってモデル時間数は七時間と設定されている。  
物語文を扱うには標準的な時間数であると言えるだろう。設定されてい  
る指導事項に関しては、「文章の構成や展開、表現の特徴について、自分  
の考えをもつこと」となっており、言語活動と教材の特性については、  
「構成や展開、表現の特徴に着目して、文章を読むこと」となっている。  
また、この目標に関連して、〈国語への関心・意欲・態度〉〈読む能力〉  
〈言語についての知識・理解・技能〉についての詳しい評価基準が設定  
されている。詳細は資料Dを参照していただきたい。

これらの資料を見ると、この作品で明記されているのは、作品に描か

れている文面上のことを理解するだけでなく、そこから自分自身の考えを持つことである。これが小学校教育から一歩先に出た到達目標となっているのだろう。また、この教材における指導目標の他の特徴は、各時に設定された評価基準からもわかるように、物語を大別し、それを登場人物や出来事ごとに整理させることに焦点を当てていることである。

これは、小学校までの物語を味わわせることに重きを置き、そこから物語の流れを理解するために努力していく、ミクロからマクロへと移行する傾向とは異なる。この教材では、読みのレベルを上げるためか、構造把握に主眼を置いて、そこからセリフなどに焦点を当てていく、マクロからミクロの視点へと切り替わっている。そうした俯瞰的な視点が必要とするのは、単に中学国語となって求められる読解レベルが上がったからという理由だけではないだろう。この作品には、展開する物語が牛飼いという語り手によって構成されているという事実も理解しながら読み進めていかなければならない。このような、オツベルや白象とは関係のない第三者の視点を意識させることによって、読み手である生徒たちにも物語の外から物語を理解させやすくなっているのではないだろうか。こうした特徴的な構造をとっている「オツベルと象」を、より深く掘り下げて行く。

#### 5. (3) 構造把握と主題―「寂しい」笑いを軸にして―

この作品も、他の作品同様に、動物たちがメインキャラクターとして登場する。また、この世界の人間は、その動物たちと言葉によって意思疎通を図ることができることが当たり前であるようだ。そのような作品世界で、オツベルという人間と白象という動物との物語が展開されてい

く。まずは、オツベルと白象がどのような性格をもったキャラクターであるのか整理したい。

オツベルは、稲こき工場を経営している人間である。その性格はしたたかで、自身の利益になりうるものであればたとえ像であろうと利用しようと思んでいる。しかしながら、その内面は工場の従業員たちという一般人とかけ離れているというわけではなく、「命がけ」で「度胸をすえて」象に話しかけ、その反応を「がたがた震え」ながら待つほどである。ハイリスクハイリターンの駆け引きを、平静を装いながら持ち出す様子は、さながらやり手のビジネスマンの素養を醸している。そうした振る舞いや実力に対して、語り手は「オツベルときたらたいしたもんだ」と評し、「頭がよくて偉い」経営者としての能力を認めているようである。しかし一方で、彼の食べているオムレツを「雑巾」と食べ物に使うにはあまりにマイナスイメージが先行するもので例えたり、白象について「牙は全体きれいな象牙でできている」と語り手に言わしめたりしていることから、利益を追求する様が、あまり好ましいものではないという側面も示唆されながら描写されている。

一方、白象は、「白い象だぜ。ペンキで塗ったのでないぜ。」と語り手に言われていることから、この世界でも珍しい存在であるということがわかる。さらにその性格は非常に温厚で、オツベルの言うことの裏に気づかないほど無邪気である。しかしその力は人間とは比べものにならず、ろくに餌を与えられずとも「あんな力」が出せるほどに桁違いの力の象徴として描かれている。しかし、そうした力を一方的に使うということはず、ひどい仕打ちをしてくるオツベルに対して復讐をするといった行動には出ない、優しさをもったキャラクターとして描かれている。

中野登志美氏は、「宮澤賢治「オツベルと象」の教材性の検討―言葉の

二重性という観点から―』『広島大学大学院教育学研究科紀要』（広島大学大学院教育学研究科 2012）において、作品構造の特徴について述べている。中野氏によれば、「語り手である「牛飼い」の語りの層の中にメタプロットとしてオツベルと白象の物語が包摂されている入れ子型の二重構造」であると同時に、「ある牛飼いが物語る」「第一日曜」「第二日曜」「第五日曜」といったテキストを挟んでいることで、「作者の層」を無視できない構造となっていると指摘している。それらを整理し、この作品を「オツベルと白象の物語」―「牛飼いの語り」―「作者」―「読者」の四層からなる入れ子型の構造であると分析している。語り手の立場を考えることによって入れ子型であるという解釈は気づくのに苦労しない部分かもしれないが、この作者を意識させているという指摘は非常に興味深い。これまで扱ってきた作品と比べて顕著に特徴的な作品構造から、あえて性質を持ったテキストにして読者側に意識を促しているののであれば、本文から作者の主張や意見といったものも出てくるのであろうか。

「オツベルと象」の主題を追っていくにあたって看過できないのは、言葉の二重性についてである。これは、オツベルから白象に発せられる言葉と、白象から仲間の象たちに送られる言葉との二種類であり、それぞれが悲劇を生んでしまっている。前者は、オツベルが白象を弱らせるために、「百キロもあるくさり」や「四百キロある分銅」を装飾品であると言って、白象に身につけさせる。それを白象は寸分も疑うことなく受け入れ、食事の量を日に日に減らされ、身動きが取れなくなるほどに弱った状態になってようやく「赤い竜の目」をしてオツベルを睨みつける。白象は言葉の二重性を察知することができず、それを知る頃にはもう手遅れとなってしまったのだ。しかし後者では、白象が「僕はずいぶんめに遭っている。みんな出てきて助けてくれ。」としか書いていないにも

かわらず、オツベルを「くしゃくしゃに」潰してしまう。ここでは、仲間の象たちが手紙の内容を深読みしたことによって起きた悲劇であると言えるだろう。こうした悲劇を生み出してしまったのは、オツベルが潰れてしまったことにより、白象自身である。そのことを自覚したためか、最後に「寂しく笑って」いるのである。ここから、この作品の主題を解釈していけるだろう。

この寂しい笑いに対して中野氏は、白象が言葉を鵜呑みにした「無知さ」と言葉の本来の意味からの乖離によって「悲劇を招いてしまった事態を痛感」したことによるものであると指摘する。しかし一方で小林俊子氏（「オツベルと象―発表された物語」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂2009）は、「白象は他の象の暴力に頼り、オツベルを死に至らしめる」と、暴力による解決は白象によるものだったと解釈した上で、インドの説話集『ジャータカ』の中で、象が困難から救った旅人や仲間の象から騙されながらも無抵抗を品位あるものとして耐え、とある王からその功績を称えられたというエピソードを引き合いに、「民話がしばしば残酷であるように、物語として、この結末は成功している。賢治は作品としての理想と、非暴力の理想とのギャップを、象のへさびし〜い笑いで表現した」と分析している。

中野氏の論は、主題に迫るという面においてはそこまで論を展開しているわけではないが、テクストの解釈としては妥当である。小林氏は、その主題について、賢治の抱く「作品としての理想と、非暴力の理想とのギャップ」であると解釈している。また小林氏は、暴力とはあくまで白象が仕向けた形であると論じている。これは、言葉の両義性という作品の特徴を踏まえたものにはなっていない。だが、中野氏の指摘する通り、この作品には語り手よりも外側の領域に作者が介在していると考え

られる。そのため、賢治がインド説話のオマージュ作品として白象の物語を書いたと解釈するならば、傾聴に値するだろう。つまり、この作品では、言葉の両義性と、力（ここではオツベルの能力と象たちの怪力）があるものが引き起こす悲劇を描いた作品であると言えるだろう。そのように考えると、何も力を行使せずに渦中に巻き込まれた白象が抱くジレンマも読み取ることができるだろう。それが「寂しい」笑いへと繋がったのかもしれない。

#### 5・(4)多様な解釈を生むのは良い教材か

さて、この作品は、特徴的な構造で作品が展開されていること、そして言葉の両義性がキーワードになっていることがわかった。そこで、あらためて指導目標を見てみたい。資料Dを見るとそこには、作品の構造に主眼を置いて読み進めていくことが明記されている。また、評価基準に明言されているわけではないが、表現の特徴に着目することを求めているいたり、言葉のすれ違いについて言及したりしていることから、教育の現場でも同様の読み進め方を促していくことを勧めているのだろう。そして、最終的に行き着く先は「自分の考えをもつこと」である。オツベルはどのような人物であるのか、白象はどうか、語り手はどうかといった人物描写から、オツベルや白象がとった行動の原因を推察させることが目的だろう。そして、最も「自分の考え」が反映される部分が、象が寂しく笑う場面であろう。これは、この作品における集大成と言っても過言ではない。それは、各々が解釈してきた人物観や展開から導かれるために、人によって解釈が異なることは当たり前だろう。宮澤賢治本人に対してアプローチをする生徒もいれば、作品世界の中で完結させる生

徒も出てくるだろう。こうした解釈の多様性が生まれることは、文学作品として優れたものであるといえよう。また、最後の「川へはいっちゃいけないったら」が、「川へは行っちゃ」なのか「川へ入っちゃ」なのか、誰から誰にかけている言葉であるのかといったことも解釈が分かれるだろう。関口氏は、「話を聞き終わって川に飛び込もうとする子供」と解釈し、中野氏は牛飼いの「牛」、「子供」の解釈の両方を紹介している。テキストにおいて地の文であることから、発話者は牛飼いであることは根拠として十分考えられるが、川へ向かう者が誰であるのかは全く情報がない。子供かもしれないし、牛かもしれないが、本論文では白象である可能性も指摘したい。仲間によって助けられた白象であるが、「寂しく笑って」いたことから読み取れるように、板挟みになった自分を悔やみ、その「川へはいっちゃいけない」と言われるような危険な場所へと向かう。当事者であったオツベルがいなくなってしまったことの責任を取るため、もしくはその辛い現実から逃れるために原因となった自分という存在を抹消しようと川へ向かったと考えられないだろうか。そのように解釈すると、この作品さらに重いテーマを孕んでいると読み釣ることができる。

こうした解釈の多様性に関して、荻原桂子氏は「文学教材の研究―宮澤賢治『オツベルと象』（中学校一年）の言語表現―」（九州女子大学紀要）（九州女子大学 2013）において、述べている。荻原氏は、国語科教育に関して、「自己の内発的動機による「伝える力」を育成するために、文学教材による国語科教育が重要である」と考えている。また、文学的文章と説明的文章の定義について、前者を「主観的な立場からみたことさらに普遍的な意味を表現したもの」であるとし、後者を「事実に関する認識や思考の経過を論理的に展開するもの」としている。そうした土

壤の上で、解釈の多様性についてこう述べる。

一つの正解を求める説明的な文章の読みの指導と違って、一つの表現から多様な解釈を生み出すのが、文学的な文章の読みの指導である。生徒が自分の読みと他の生徒の読みの違いに気付いたり、または新たな発見をしたりしてお互いの関係を築いていくことに国語科における文学教材の効用がある。

確かに、文学とは自身の意見を持ち、それを他者の意見と交換、照らし合わせることで、別の視野を得たり、表現の仕方を学んだり、自身の読みへの知見を高めることができる分野である。そうした議論が起きるためには、ある種決着がつかないような謎があることが好ましいのかもしれない。そうした視点から考えると、川へ近づくものは誰か、白象はなぜ寂しく笑うのかといった、一元的に物事を結論付けられないこの作品は、やはり文学作品として優秀である。

しかし、優秀な文学作品が、優秀な文学教材であると結論付けるのは早計ではないだろうか。解釈が分かれるということは、授業内で問題が解決しないということである。それは、生徒たちからすれば、歯切れの悪いものになりかねない。「オツベルと象」は、作品の構造の把握など、俯瞰的な読みを実践する力を養うことなどに優れ、読解能力の向上が見込める有意義な教材である。しかしそれと同時に、解釈の多様化という問題を浮き彫りにしたこの教材は、まさに、国語科と文学の間に位置する作品なのである。この文学と国語科という視座を持って、国語科のあり方についてこれから論じていきたい。

## 7. 「自由に読む」という現代国語教育の育成方針

『小学校学習指導要領解説 国語編』（文部科学省 2008）、『中学校学習指導要領解説 国語編』（文部科学省 2008）には、国語科による教育の基本的な趣旨をまとめている。小学校版と中学校版の双方に共通しているのは、言語教育としての立場を重視し、「国語を尊重する態度を育てる」とともに、「各教科の学習の基本ともなる国語の能力を身に付ける」ことで、「我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てる」ことである。また、最近の傾向として見られるのが、「個性」を重視した教育方針である。いわゆる皆違ってみんな良いという状態なのであろうが、国語科における読みの実践についても、こうした態度で良いのだろうか。このことに関して、須貝千里氏は、著書『これからの文学教育のゆくえ』（右文書院 2005）において、国語科教育に必要なのは、「還元不可能な複数性」であり、「容認可能な複数性」ではないことを示している。これらが倒錯してしまっているために、「正解到達主義を批判しながら、正解到達主義に陥ってしまう」のだという。そして、「国語」を理解するためには、実体のある「共同性」と到達不可能な《他者》である「公共性」をそれぞれ考慮する必要があると論じている。また、須貝氏は、そもそも「読むことに正解は無い」うえに成り立つ国語科において、価値相対主義からの脱却を求め、価値絶対主義へと移行していく姿勢を示しているものの、その実態は「エセ価値相対主義」にとどまってしまうしていると指摘する。つまり、個性や多様性といった「内心の自由」について、「自由はあるように思う。しかし、ないのです。」と問題提起を掲げた。読むことの意義は、「その過程における〈原文〉の影の働きによる世界が新しく見えてくる体験（自己倒壊）にある」ことであり、国語教育はそれを受け止めることが求められていると論じた。

確かに、自由に読む、多様な解釈をする、という行為は、価値絶対主

義に反していると言えよう。なぜなら、自由に読むようにある種強制されているということは、自身の思考プロセスに何かしら恣意的な外的要因が孕むことは明らかであるからだ。そうしたつくられた価値絶対主義という読み方は、文学作品を自身の手によって味わっているとは考えにくいものとなってしまう。「読むことに正解は無い」のだから、当人たちの頭の中で世界を完結させ、それを共有する場を設けることが、文学を教育に活かすうえでは本質に迫っていると言えるだろう。だが、それは国語科としてあるべき姿なのであるうか。

## 8・文学と国語科、賢治文学を通して考える

本論文では、主に賢治文学を教材化する意義について論じてきた。「やまなし」「注文の多い料理店」「雪わたり」「オツベルと象」の4作品には、それぞれ異なる特徴も見られるが、やはり同一作者ということもあつて、共通点も多く見受けられる。その一例を挙げるとするならば、二項対立による境界の存在であろうか。「やまなし」では水面が、「注文の多い料理店」ではキャラクター間の性質が、「雪わたり」では人間と狐の社会が、「オツベルと象」でも、人間と象との関係が境界を生み出している。また、「注文の多い料理店」と「オツベルと象」では、言葉の捉え方という共通の仕組みが物語の重要な役割を担っていた。作品から宮澤賢治の主張を論じるという点で読むことになると、このように作品間の比較を行わなければ賢治の願いといったものの読み取りが、読者の独りよがりなものになりかねない。しかし、国語科教育においては、同一作者の作品を連続して、もしくは学年をまたいで取り扱い、その比較を行うという指導方法はとっていない。つまり、「イーハトーヴの夢」を扱いつつ（造

語による世界観を阻害しかねない危うさはあるが）「やまなし」を読ませようとしている。A・B 光村版教科書を除けば、その趣旨はその場で初めて出会ったテキストから読みを展開する必要がある。つまり、作者という先入観を取り払った状態で、各々の世界を構築させたいのだろう。そこには、非実在世界の出来事であったり、含みを持たせた表現であったりすることから、多様な解釈はもちろん生まれるだろう。

しかし、そうした学習の総括として行われるのは、到達度の確認という名目で行われるテストである。有意義な授業が行われたとしても、行き着く先がこのような機械的な判定方法であるというのはいかなるものであろうか。読解プロセスの自由さをいくら謳ったところで、テストがあるという意識が教室にある以上、その読みは「価値絶対主義」ではなく「価値相対主義」へと陥ってしまう。これが、評価基準を設け、いわゆる通知表やテストの成績に数字として出てしまう「国語科」の危ういさなのだ。

## 9. 終わりに

文学作品とは、キャラクターの性質や関係、文どうしが生み出す文脈から、自身の頭の中で世界を生み出す着火材である。そのため、読み手によって様々な世界が紡ぎ出される。賢治文学は、特にその解釈の多様性を生むという点において優れており、一元的な解釈をさせないという、文学作品として傑出したものであると言えるだろう。多様性は文学の醍醐味であり、そこに一般化された答えはない。しかし、その多様性というのは結局、「文学」の立場から見たものではないだろうか。先述したように、「国語科」には、評定をつける、点数をつけるという側面から、答

えを求められる場面がどうしても生まれてしまう。児童・生徒たちからすれば、悪い評価よりも良い評価を取りたいという考えに至るのは想像に難くないであろうし、そうした前提のもとで読みを行うと、それはもはや自発的な読みではなく、他者に強制された読みとなってしまうだろう。

ここで、本論の帰結として提案したいのは、現代国語教育の見直しである。国語科において、物語文を扱う際には、当たり前のことだが、小説や童話といった、解釈が一元的にはなりえない題材を扱う必要性が出てくる。一方で、説明文というのは、筆者の主張を正しく理解するために一元的な解釈をする能力を必要とする。そのため、画一化された評価基準によってこれら二つに大別された題材を同様に指導・評価していくことは賢明ではない。そこで、それぞれの文章形態の特長を生かすために、評価方式を変えていく必要があるのではないだろうか。説明文や評論に関しては、そのテキストに書いてある事実や筆者の主張を正しく理解できているのかという力を試すために、テストという現在と同様の 방식을維持していくことも大切だろう。だが、小説や物語文に関しては、テキストから読み取れるものをどのように読み取ったのかという「多様性」「個性」を重視するのであれば、その自身の考えに至った根拠や経緯を説明したり、相手の考えを受け入れる柔軟さを養ったりするような、ディベート形式であったり、実践的な評価形式を取り入れる必要があるように感じられる。

もちろん、こうした指導方式を導入するのであれば、それに伴い教師の求められる能力というのも変わってくるであろうし、それが児童・生徒たちの能力や思考力を養う一般的で絶対的正確ではないだろう。しかし、現代の教育制度、言い換えるならば、受験やテストというものを意

識した教育体制に、「国語科」における賢治作品のような、答えを見出すことが非常に難しい「小説」「物語文」は、お互いの特性がかみ合っていないだろう。そのために、読み方は個人個人にあるのにテストでは答えを求められているという矛盾が生じる。そうした現状を改善し、答えのない読みというものもあるという認識をきちんと指導できる環境を整えなければならぬだろう。そうしなければ、「国語科は答えがまちまちでよくわからないものだ」と、読解そのものに対して疑念が生まれ、積極性が損なわれる「国語科」アレルギーを生み出しかねない。そういった危機を防ぐためにも、このぎこちなく回っている歯車に油を差さねばならないのではないか、と問題提起をし、本論をまとめることとする。

## 巻末資料

### A「やまなし」

#### A-a『学習指導書別冊 国語 六 創造』光村図書 2015

◎作品の特徴や作者の思いを捉え、自分の感じたことが伝わるように朗読することができる。

○場面についての描写を捉え、作品の中で使われている表現を味わいながら、優れた叙述について自分の考えをまとめることができる。

朗読で表現しよう

①資料「イーハトーヴの夢」を読んで、作者である宮澤賢治の生き方や考え方を知ろう。そして、「やまなし」に通じるところがないかを考えよう。

②グループで話し合い、朗読する場面を選ぼう。選んだ場面を、どのように朗読すればいいかを考えよう。

③選んだ場面を朗読し、聞き合った感想をたがいに伝えよう。

これが最も大きな、授業全体における指導目標であり、テキストごとにも小目標や授業における手引きが描かれている。それらのうち、特に重要と思われる、読解・授業の方向性について言及するものを、目標〈場面〉の形で並べる。

▽自分のもっている「五月」の印象を発表させる。 ○五月という

季節の印象として「新しい生命の芽吹く季節」「生き物の活動が活発になる季節」など、「明暗」でいうなら「明」、「静動」でいうなら「動」など。〈五月の表記に対して〉

○この正体について、時間をかけることは避けたい〈コラムボンにつ

いて〉

▽明るい印象の描写に変化。比喻や色彩語、擬態語に着目させ、美しい情景を味わわせる。〈水面へ日差しが差し込む描写がある場面〉

▽父のかにの優しさに気付かせたい〈魚がカワセミに捕えられ、父カニが怖がらせまいと兄弟たちを気遣う場面〉

▽自分の持っている「十二月」の印象を発表させる。      ▽十二月と

いう季語の印象として、「あらゆる生命の休止あるいは終わりを迎える季節」など、「明暗」でいうなら「暗」、「静動」でいうなら「静」など、先の五月と対比的に見る視点を想起させる。〈十二月    の表記に対して〉

▽「すっかり変わった」ことの具体を考えさせ、五月と十二月が対になっている構造に気づかせる。〈十二月冒頭の情景描写の場面〉

▽朗読の際には、「・・・だい。」「・・・や。」の文末に見える意地になっていく弟の幼さ、優越感をもって接していながらも、だんだんと躍起になっていく兄の心情を押さえさせる。      ▽五月の場面での兄弟の会話と比較し、

語彙が豊かになっていることや、理屈っぽくなっているところなどから、成長に気づかせたい。〈兄弟カニが自分の吐く泡について話す場面〉  
▽会話の最中に、突然何かが飛びこみ、その場の雰囲気を変えてしまう展開が、五月と重なることに気づかせたい。      ▽五月との印象の違いや兄弟の対応の差について気づいたことを話し合わせる。〈やまなしが水面に落ちる場面〉

▽その注意深さが分かる表現から、子どもたちの心配に対してしっかり対応しようとする父親の心情に気づかせたい。〈父カニがやまなしを見る場面〉

○やまなしの生命感が次第に高まるイメージ（「波はいよいよ青いほのおを上げ」の描写に対して）

○やまなしにとっての生命の終わりを意味するが、ここでは、そればかりでなく、他の命のために生きることの意味する。へやまなしが熟していると分かる場面）

▽五月に飛び込んできた「かわせみ」は、魚の命をうばう存在であった。十二月に飛び込んできた「やまなし」は、みんなを幸せな気持ちにさせる。その対比に気づかせたい。▽やまなしとかわせみや他の魚を比べ、生命とその終わり方について、作者がどのような世界を描いたのか、考えさせる。〈具体的な指示箇所なし。総括としてか〉

○語り手の作り出した世界であることが分かる。〈「私の幻灯は」の描写に対して〉

A-b『みんなと学ぶ小学校国語 五年 上 教師用指導書 朱書編』学校図書 2015

みんなで本を楽しもう

読んでもらったり、読んで聞かせたりしましょう。

おもしろさを分析しよう △個人個人で着目点が変化する。ここでは、その着目点の違いによりどんな気づきや感想が出てくるのか、その点のおもしろさを交流させるようにする。

グループで話し合おう

①ユーモアを感じるところ

②音を表す言葉などの使い方

③登場人物の書き表し方

④ 物語のすじの組み立て（五月と十二月の対比）

△結論を出す話し合いではないので、ともすれば発言しっぱなし、ということにもなりかねない。相手が面白いと感じたところはメモしておき、その視点で何度か読み返すようにさせるとよい。

先と同様に、本文に対する小目標は、以下の通りである。

- ▽何が起きたのか想像させるとよい。〈カワセミが魚を捕らえる場面〉
- ▽何が起きたか考えさせてもよい（かわせみのときとのちがい）〈やまなしが水面に落ちてくる場面〉
- ▽生命の終わり方（魚との違い）を考えさせる。〈やまなしがお酒になると父カニが語った場面〉

B 「注文の多い料理店」

B-a 『みんなと学ぶ小学校国語 五年 上 教師用指導書 朱書編』 学校図書 2015

教材の目標

関心 自分勝手な紳士たちが危機的な状況に陥っていく物語を読み、作品の世界を楽しもうとしている。その他の同一作者の作品の叙述から、表現のしかたや物語の書かれ方に関心を持ち、読み進めようとしている。

読む 紳士と山猫たちの相互関係や心情、場面についての描写を捉え、優れた叙述に着目しながら読むことができる。

話す・聞く 読み取った内容と自分の役柄を関連づけながら質疑応答するとともに、互いの発言の意図や根拠を比べながら話し合うことができる。

書く 読んだ作品の面白さをまとめることができる。

伝国 比喩表現などの特徴的な言葉の使い方をとらえることができる。

主題 動物を殺すことを何とも思っていなかった二人の若い紳士が、いつの間にか逆に動物に殺されようとしていたおかしさと不気味さ。さらにそこに込められた、動物の命を何とも思っていない、傲慢で我儘な人間に対する警告。

全6時間（①～⑥は授業のコマ数を表す）

#### ①学習の展開

1. 題名から考えたことを話し合う。

○ 題名の「注文の多い料理店」とは、どういう意味なのか、考えたことを自由に発表させる。

○ 「注文の多い」というのは、何の「注文」なのか想像させる。

2. 全文を読み、初発の感想を書く。

○ 驚いたことや関心をもったこと、もっと知りたいこと、疑問に思ったこと、登場人物に聞いてみたいことなどを自由に書かせる。

3. 初発の感想を発表し合い、学習への見通しを持つ。

○ 初発の感想が今後の学習につながることを伝える。

- できるだけ多くの児童に感想を発表させ、お互いの感想の交流をさせる。

- 教科書p92・93をもとに、ゲームのやり方を確認させる。

目標 全文を読み、初発の感想を書いたり、学習の見通しをもととしたりすることができる。

#### 評価の観点と方法

題名についての考えをもち、その視点をもとに初発の感想を書いたり学習の見通しをもととしたりしているか、感想文や話し合いの様子をもとに評価する。

#### ②学習の展開

1. 全文を読み本時のめあてを確認する。

- 初発の感想からのつながりをもって、本時のめあてを設定させる。

- 音読しながら、めあてにかかわる叙述に線を引かせるようにする。

2. 叙述を読み取る

- 「ずいぶん痛快だろうね。」などの会話から、生活のためでなく、娯楽として狩りをしてきたことを読み取らせる。

- 「実にぼくは、二千四百円の損害だ」などの会話から、生き物をお金の損得でしか見ていない二人の紳士の生き物に対する考え方を読み取らせる。

3. 紳士の性格を話し合う。

- 今までの叙述をもとに、動物をお金でしか見ておらず、自分の楽しみのためだけに、生き物を殺そうとしている二人

の紳士の性格をノートに書かせる。

- 教師は机間指導をして、児童の読みの傾向をつかみ、意図的指名に役立てる。

4. 本時のまとめをする。

- 読み取ったことをもとに、紳士の心情を吹き出しに書かせ、発表させる。

目標

山に狩りに来た二人の紳士の言動から、紳士の自然や生き物に対する考えを読み取ることができる。

評価の観点と方法

叙述をもとに、二人の紳士の自然や生き物に対する考えを読み取っているか、発言やノートなどへの記述をもとに評価する。

③学習の展開

1. 全文を読み本時のめあてを確認する。

- 音読しながら、めあてにかかわる叙述に線を引かせるようにする。

2. 叙述を読み取る。

- 自分は歓迎されていると喜んでいることを理解させる。
- 本当の意味は、紳士を食べるために歓迎していることを理解させる。

3. 紳士の性格を話し合う。

- 紳士の考えとドアに書かれた言葉の意味が違う本当の意味があることを理解させ、紳士の性格をまとめさせる。
  - ・ ドアの言葉
  - ・ 本当の意味
  - ・ 紳士の性格

4. 本時のまとめをする。

- 読み取ったことをもとに、紳士の心情を吹き出しに書かせ、発表させる。

目標 料理店に入った紳士が、注文を読みながら次第に食べられることに気付いていく様子を読み取ることができる。

評価の観点と方法

二人の紳士の思い込みと、看板に書かれた言葉の本当に意味を読み取っているか、ノートや吹き出しへの書き込みをもとに評価する。

④学習の展開

1. 全文を読み本時のめあてを確認する。

- 二人の紳士の言動に線を引かせながら読ませる。

2. 叙述を読み取る。

- 着るものも散らばり、山に来たときと違い、惨めな格好になっっていることを理解させる。

- 狩りの獲物がいないと格好が悪いので、山鳥を買って帰ろうとする紳士の見栄があることを理解させる。

- 今までの紳士の言動をふり返り、紳士の顔が紙くずのようになったのは、自らがまねいた結果であることを理解させる。

3. 紳士の性格を話し合う。

- 二人の紳士は実は自分の見栄や自然に対する傲慢さが自ら招いたことであることに気付いていないことを読み取らせる。

- 怖くて惨めな思いをしたことを隠すように、山鳥を買って

帰ってきたことに気づかせる。

4. 本時のまとめをする。

- 実際に、紳士の心情を理解するために、吹き出しに自分なりの言葉で書かせるようにする。

目標 二人の紳士の顔がくしゃくしゃになつてもとに戻らない様子を読み取ることができる。

評価の観点と方法

紳士が自ら招いて恐怖を経験しながら、それでも反省の様子もない二人の心情を読みとっているか、発言や吹き出しへの記述をもとに評価する。

⑤学習の展開

1. p92を読んで、「物語の人物が答えます」ゲームのやり方を確認する。

- ゲームのやり方を説明しながら読み進める。

2. 登場人物の性格について確認する。

- 前時までにまとめた登場人物の性格を出させ、なりきるときに参考にさせる。

3. ゲームをする。

- クラスの実態に合わせて人数調整をする。
- 班の中で質問に答える人と質問する人に分ける。
- 初発の感想や、登場人物にある場面でどんな気持ちになったかなどを質問してみる。

- 聞いたことをワークシートにメモさせておく。

4. 発表をする

- メモをもとに発表させる。

○ 時間があれば、回答に窮した質問の答えをみんなでも考えても良い。

5. 本時のまとめをする。

○ 心に残った登場人物と、その理由を書かせる。

○ 紙くずのようになった顔が、どうしてもとに戻らなかったのか書かせる。

## ⑥学習の展開

1. テーマを決めて作品を読む。

○ 同一作者や、ジャンル、物語の舞台など自分でテーマを決めて、本を読ませるようにする。そのため、並行読書をさせておくと良い。

2. 本の記録カードの書き方を知る。(教科書 P95 参照)

○ 項目の確認をする。

・ 署名

・ 作者・筆者

・ 出版社・発行年

・ どこにあるか

・ 内容

○ 説明的文章では、注目したり心に残ったりした事実や考え方を、文学的文章では、得た感動の根拠となる情景などを、自分自身の感想を加えて内容紹介としてあげることが望ましい。場合によっては、の項目めを立て、「一言感想」を加えても良い。

3. 調べた本の記録カードを書く。

○ 記録カードにして、どのような内容の本かがわかるようにす

るという、目的に応じた表現を用いて書くことを意識させる。

4. 作品を紹介する。

○ どんな内容のことが書かれているか、発表し合う。おすすめの項目を紹介しても良い。

5. 本時のまとめをする。

B-6『新編 新しい国語五 教師用指導書 研究編』東京書籍 2015

単元の目標 物語の構成や表現の工夫を見つけて、作品の良さを解説することができる。

配当時間 10

単元設定の意図

つきたい力 物語の構成や表現の工夫に着目して、自分の考えをまとめる。

←児童は、これまでに物語の構成や山場での変化に着目して読むことを学習している。しかし、作中の中の優れた叙述や表現の工夫の良さに気づき、自分の考えを持つには至っていない。本単元では、物語の解説文を書く活動を通して、物語の構成の工夫や、二通りの意味に取れる言葉、擬声語・擬態語や色彩豊かな表現など、さまざまな表現の工夫の良さに気づき、自分の考えをまとめる力をつけることをねらいとした。

言語活動 物語のおもしろさを解説する文章を書く。

←物語の良さについて解説文を書く言語活動を設定した。作品の良さを解説するためには、物語の特徴や優れた点に気づくことが必要となる。物語の構成に、どのような工夫や仕掛けがあるのか、また、文章表現や言葉の使い方に、どんな工夫があるのかを考えながら読む力を身につけさせたい。

教材の特徴 ・ 現実の世界↑不思議な世界↑現実の世界という構成で

ある。

・ 二通りの意味に取れる言葉が用いられている。

←現実の世界、不思議な世界、現実の世界を行き来するファンタジーの構造を持つ物語である。また、題名や料理店の「戸」の言葉に二つの意味が隠され、それが物語全体の大きな仕掛けとなっている。色彩を使った表現や擬声語・擬態語なども用いられ、物語世界に引き込む工夫が数多くある。物語の良さやおもしろさを生み出す工夫を採しやすい教材である。

#### 学習指導計画

1時

1. 学習の見通しを立てる。

・ 題名や絵から物語の内容を想像し、「注文の多い料理店」について意見を出し合う。

・ 教材文を通読し、物語のおもしろさを解説する文章を書くという学習課題を確かめる。

#### 評価基準と評価方法

関 物語の構成や表現の工夫について解説文を書くことに意欲を持ち、目的を持って挑もうとしている。

2～6時

2. 物語の構成や出来事の流れを押さえる。

・ 不思議な世界の入り口と出口を確かめ、物語の構成をつかむ。

・ 料理店の戸の意味に気をつけて、二人の紳士の気持ちの移り変わりを読み取る。

・ 料理店を見つける前の紳士たちの様子と現実の世界に戻った時の

紳士たちの様子を比べ、変わったところ、変わらなかったところについて考える。

#### 評価基準と評価方法

読 物語の構成の工夫や戸の言葉のふた通りの意味などの表現の工夫に気付いている。

読 紳士たちの人物像をとらえ、戸の言葉の意味や紳士たちの気持ちの変化を想像しながら読んでいる。

#### 7・8時

#### 3 表現の工夫を探し、解説する文章を書く。

・物語の中から、表現の工夫を探し、自分が解説したいものを選ぶ。  
・「注文の多い料理店」のおもしろさの秘密を解説する文章を書く。

#### 評価基準と評価方法

読 物語のおもしろさを生み出す優れた表現を見つけて、自分の考えを解説文にまとめている。

書 目的に応じて、小見出しをつけたり、例を挙げたりしながら、解説文を書いている。

言 物語の構成の工夫や、比喻や反復などの表現の工夫に気付いている。

#### 9・10時

#### 4 解説文を読み合い、感想を交流する。

・友達の解説文を読んだり、自分の解説文を発表したりして、交流し合う

5 物語の構成をとらえ、物語の表現の工夫を解説する文章を書くことができたか、振り返る。

・本単元で学んだことと感想をまとめる。

## 評価基準と評価方法

読 物語のおもしろさの秘密を見つけて自分の考えを解説文にまとめることができたか振り返っている。

読 物語の良さを解説文に書いて伝え合い、感想を交流することで自分の考えを広げたり深めたりしている。

## C 「雪わたり」

C-2 『小学生の国語 6年 学習指導書②』三省堂 2011

目標 表現のおもしろさをふまえて朗読の仕方を工夫するとともに、

宮沢賢治の作品を読み比べて考えを深める

## 領域・指導事項

### 「C読むこと」

イ 目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること。

オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。

### 〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

イ（カ） 語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心を持つこと。

イ（ケ） 比喻や反復などの表現の工夫に気付くこと。

## 言語活動例

### 「C読むこと」

エ 本を読んで推薦の文章を書くこと。

配当時間・学習時期 四時間扱い・三月上旬

【評価基準】

関 物語のおもしろさを見つけ、発表したり朗読したりして表現しようとしている

読 表現のおもしろさをとらえ、役割を決めて様子がわかるように音読している。

読 宮澤賢治の他の作品を読み、おもしろさを文章で伝えていく。を述べている

1次 通読し、初発の感想を交流する。

1時限

学習活動の流れ

○ 「雪わたり」という題名について話し合う。

○ 教材文を通読し、面白いと思ったところを発表する。

評価基準

・教材文のおもしろいところを見つけ、興味をもって読んでいく。

2次 「雪わたり」の表現のおもしろさを味わうとともに、内容を深く深める。

2時限

学習活動の流れ

○ 「その一」の会話部分を、様子を想像しながら音読し、表現のおもしろさを味わうとともに、四郎やかん子、紺三郎の様子や気持ちの変化を話し合う。

○ グループごとに役割を決め、音読する。

評価基準

・ 四郎やかん子のように紺三郎と仲よくなっていくのかを考えながら音読している。

3 時 限

学習活動の流れ

○ きつねたちが、躍り上がるほど喜んだのはなぜかを話し合う。

○ きつねたちの気持ちや四郎とかん子の気持ちがよくわかるように工夫して役割読みをする。

評価基準

・ きつねたちが躍り上がるほど喜んだわけを、叙述をもとに考えている。

・ 話しあったことをもとに音読で読みを確かめている。

・ 様子がわかるように工夫して音読している。

3 次 宮澤賢治の作品を読んで、紹介し合う。

4 時 限

学習活動の流れ

○ 宮澤賢治の他の作品を読み、おもしろかったものを推薦する文章を書く。

評価基準

・ 宮澤賢治の他の作品を読み、話のおもしろさが伝わるように文章に書いている。

単元の目標 人物や場面の描かれ方を読み味わいながら、読書生活を豊かにする。

る。

『雪わたり』

- ① 表現の工夫や登場人物の性格について考える。(3時間)
- ② 『雪わたり』のおもしろさを考えて、発表し合う。(1時間)

教材の目標 表現の工夫をとおして、『雪わたり』のおもしろさを発表する。

評価基準

関 表現の工夫をとおして、『雪わたり』のおもしろさを発表しようとしている。

読 情景描写や、登場人物の行動や気持ちなど、表現の工夫をとおして、『雪わたり』のおもしろさを読んでいる。

言 比喻や反復などの表現の工夫に気づいたり、語感、言葉の使い方について気をつけたりしている。

『「図書すいせん会」を開こう』

- ① 「図書すいせん会」を開く。(6時間)

教材の目標 印象に残った作品を取り上げ、推薦の仕方を工夫して、「図書すいせん会」を開く。

#### 評価基準

関 日常の読書に親しみ、すすんで「図書すいせん会」の準備をし、発表しようとしている。

読 読書をもとに「図書すいせん会」に向けて、内容を整理して書き、揭示している。

書 推薦する本を紹介する文章を、相手や目的を明確にして書いていく。

言 推薦する文章を、感想や、短い言葉を使って表現している。

#### 1時

1. 単元とびらを読んで、学習の見通しを持つ。

○表現の工夫や登場人物の性格を考えながら読み、物語のおもしろいところを発表する。さらに、推薦の仕方を工夫して「図書すいせん会」を開くという単元の見通しをもたせる。

#### 2時

2. 表現の工夫や登場人物の性格について考える。

(1)登場人物の性格を、教科書に取り上げられた四郎、かん子、紺三郎についての表現などをもとに、ノートにまとめる。

○三人の主な登場人物が特徴的に描かれている。教科書では、それぞれ一箇所の行動から性格を類推させるようにしているが、他の箇所も合わせて探すことによって、その根拠をよりはっきりさせたい。

○性格を、「○○な人」と一面的に限定することは避けたい。様々な視

点から、登場人物に光をあてるようにしたい。

### 3・4時

(2)表現の工夫について、次の二つの点をノートにまとめる。

＊リズムのある表現

＊たとえを使った情景描写

○「リズムのある表現」・・・教科書に取り上げてあるものの他にも、歌であったり、呼びかけであったり多くの箇所がある。「五・七調」が基本となっており、この物語全体のリズムを形づくっている。声に出して読み、リズムを感じさせたい。

○「たとえを使った情景描写」・・・教科書で取り上げた例にもあるように、直喩と暗喩をふんだんに使って情景を描写している。それらが、「冬」を象徴するような冷たく鋭い透明感の中に、「あたたかさ」を感じさせているようである。

### 5時

3・『雪わたり』のおもしろさを考えて、発表し合う。

○ここである「おもしろさ」とは、「おかしい」という笑いを誘うようなことではなく、興味をもった、印象に残ったなどの意味である。

○二つの視点から考えることができる。

「表現の特徴」から

「人間の行動、あるいは、人物の相互交流」から

教科書の例の女の子は、前者の視点で考えている。(女の子のキャラクターが『雪わたり』のおもしろさは、リズムのある表現です。五音・七音が歌のようにひびきます。」と話している様子が描かれている) 後者の視点から「おもしろさ」をとらえていってもよい。

○発表にあたっては、「なるほどと思ったところ」「いいなと思うところ

ろ」など、長所を中心に聞き合うようにする。

6・7時

4・「図書すいせん会」を開く。

(1)「すいせん」したい本を選び、「図書すいせん会」の準備をする。

○教科書p72にある手順をもとに、発表の準備をする。

○「すいせんの方法」は、例として6点紹介されている。そのうち4点が教科書で具体的に示されている。これら以外の方法があれば、創意・工夫させたい。

8～10時

(2)紹介の仕方を工夫しながら、推薦の文章を書く。

○4点の具体例をみると、どのように作るか、どこに、どのようなことを書くかなど、丁寧に紹介されている。「一言書評」「特集する作者の例」「宣伝文句」「本のおもしろかったところや読んだ感想」などを、ポップや帯紙に取り入れてもよいし、「本の内容を、読んでみたくなるような短い言葉にまとめて書く。」「本のテーマに合うように、絵をkaitたり、形をくふうしたりする。」などを、新聞やポスターに利用することもできる。

11時

(3)「図書すいせん会」を開き、感想を交流し合う。

○互いのグループの作品を見ながら、感想を交流し合う。

○くふうされている点、よくできている点など、互いによくできているところを評価し合うようにする。

この指導書においては、小学校教材と異なることもあつてか、具体的な指導案が比較的事細かく記載されている。そのため、本論文では資料として掲載するにあたっては、主に授業における総括として機能するであろう評価基準を中心にまとめることにした。

【この教材で学習する指導事項】

- ・文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと。

〔C(1)エ〕

〈言語活動と教材の特性について〉

構成や展開、表現の特徴に着目して、文章を読むこと

1 目標と評価の解説

目標について

- 作品の構成や展開、表現の特徴について自分の考えをもつ。
- 語句の意味や擬声語・擬態語に注意し、その工夫や効果を理解する。

評価について

〈国語への関心・意欲・態度〉

〔評価基準〕

- ・作品の展開や登場人物に関心をもち、あらすじを捉えようとしている。

#### 「Bの判定基準」

・それぞれの登場人物に関心を持ち、あらすじをまとめようとしている。

#### 「Aの具体的な姿の例」

・オツベルと白象、牛飼いにどのような特徴があるかをまとめ、それを交えて作品の展開を他の人に紹介しようとしている。

#### 「Cへの支援」

・登場人物をあげさせ、結末がどうなったのかをまとめさせる。

#### 〈読む能力〉

#### 「評価基準」

・作品の構成や展開、表現の特徴に関心を持ち、自分の考えをもっている。

#### 「Bの判定基準」

・作品の構成や展開、表現の特徴に関心を持ち、自分の考えをもっている。

#### 「Aの具体的な姿の例」

・オツベルが見ている世界、白象が見ている世界、そして牛飼いが見ている世界がそれぞれのようなか、教材の構成や展開、表現の特徴をもとにした考えをもっている。

#### 「Cへの支援」

・「オツベルときたらたいしたもんだ。」「オツベルかね、そのオツベルは、俺も言おうとしてたんだが、いなくなったよ。」という場面の始まりの文に着目し、それらがどのような意識から発せられた言葉であるかを考えさせる。

〈言語についての知識・理解・技能〉

「評価基準」

- ・ 語句の意味や擬声語・擬態語に注意し、その工夫や効果を理解している。

「Bの判定基準」

- ・ 擬声語・擬態語を捉えて、その効果を考えている。

「Aの具体的な姿の例」

- ・ 「のんのんのん」「グラリアガア」「ドーン」などの表現が繰り返し現れることを理解し、それらがもつ効果を指摘している。

「Cへの支援」

- ・ 擬声語・擬態語がどのようなものであるのか、他の例を示すなどして理解させ、作品中の表現がどのようなことをさしているのか考えさせる。また、描かれている世界がどのようなイメージのものなのか、絵などに描くことによって、表現方法の意味を理解させる。

2 教材の特色（テキストの量が多いため、本論文では要約して掲載する）

構成

『オツベルと象』の構成は、まず「ある牛飼いが語る」と語り手の提示を行い、そこに「第一日曜」「第二日曜」「第五日曜」が続く形である。そして、結びは牛飼いの「おや、川へはいっちゃいけないったら。」という語りで終わっている。

表現

本教材では、牛飼いがオツベル、白象をそれぞれのように捉えてい

るかが語りに明確に表れている。さらに、オツベルと白象の言葉の意図するところが常にすれ違っていることも特徴である。そして、牛飼いが語るという特徴的な叙述方法から、誰が語る物語なのかを示すということが、これから読み解いていくうえで重要な鍵となる。

### 教材の価値

『オツベルと象』には、三つの世界がある。それは、牛飼いの語る世界、オツベルの世界、白象の世界である。読みの中心となるのは後者二つである。オツベルの世界は大規模経営・効率が優先される世界であり、象の世界は、百姓どもから恐れられる、超越的な力を持った世界である。

語り手の役割、語りの意味、二つの時間が流れているという構成、擬声語・擬態語の効果など、中学生の文学を学ぶために必要な読み方を体験させたい。

## 3 授業の展開

### 第1時

#### 学習の流れ

#### 1 『オツベルと象』を読む。

(1) 指導者が範読する。

#### 2 登場人物と作品の構成を確認する。

(1) 登場人物の確認

(2) 構成の確認―冒頭の設定

(3) 構成の確認―三つの「日曜」の確認

#### 3 【確かめよう】

擬声語・擬態語に注目する。

(1) 擬声語・擬態語の使われ方の特徴と効果について話し合う。

#### 《評価》

・登場人物を確認し、作品の特徴を捉えている。

・擬声語・擬態語の使われ方の特徴とその効果を理解している。

### 第2時

#### 学習の流れ

1 「第一日曜」を読む。

(1) 学習者による「第一日曜」の音読。

2 オツベルの人物造形を読む。

(1) 冒頭部における人物造形をまとめる。

(2) 百姓どもとの対比における人物造形をまとめる。

3 【深めよう①】

オツベルと白象の会話から、それぞれのどのような人物として描かれているか捉える。

(1) 会話部分について、役割を決めて再現する。

(2) オツベルの話し方の特徴について、気づいたことを発表する。

(3) 白象の話し方の特徴について、気づいたことを発表する。

(4) オツベルと白象がどのような人物として描かれているかどうかをまとめる。

4 二人の会話を語る牛飼いの語り方の特徴を捉える。

#### 《評価》

- ・オツベルと白象の会話をもとにして、それぞれの人物像を捉えている。

### 第3時

#### 学習の流れ

- 1 「第二日曜」「第五日曜」を読む。  
(1)学習者による「第二日曜」「第五日曜」の音読。
- 2 「第二日曜」のできごとを捉え、「第一日曜」と比べる。  
(1)オツベルと白象の会話をまとめる。  
(2)「第一日曜」「第二日曜」を通じた人物像をまとめる。

#### 3 【深めよう②】

「第五日曜」のできごとを捉え、「第一日曜」「第二日曜」と比べる。

- (1)「第五日曜」のできごとを捉える。
- (2)「第一日曜」「第二日曜」との共通点、相違点をまとめる。
- 4 「第一日曜」「第二日曜」と「第五日曜」における白象の思いを解釈する。

#### 《評価》

- ・「第一日曜」「第二日曜」のできごとと、「第五日曜」のできごとから、共通点と相違点を比べている。

### 第4時

#### 学習の流れ

#### 1 【深めよう④】

「ああ、ありがとう。ほんとに僕は助かったよ。」という発言の意

味を考える。

- (1) オツベルと白象の人物としての違いを発表する。
- (2) 白象が仲間の像に助けられるまでの経過を振り返る。
- (3) いくつかの根拠をもとに、読みをグループで交流する。
- 2 他のグループの発表を聞く。
- 3 他の意見を受けて、自らの意見を書く。

#### 《評価》

・「ああ、ありがとう。ほんとに僕は助かったよ。」と、白象が「寂しく笑って」いった理由について、文章にまとめている。

#### 第5時

##### 学習の流れ

- 1 『オツベルと象』を音読する。

##### 2 【考えよう】

「第一日曜」「第二日曜」と「第五日曜」では、牛飼いの語り方が変化していることを踏まえ、牛飼いがどのような気持ちでこの物語を語ったのか考える。

- (1) 「第一日曜」「第二日曜」「第五日曜」の、それぞれの冒頭と結末の部分に注目させる。

- (2) 「第三日曜」「第四日曜」が語られていない理由について考えさせる。

- 3 「おや、川へはいっちゃいけないったら。」について考える。

《評価》

- ・「第一日曜」「第二日曜」と「第五日曜」では、牛飼いの語り方が変化していることを踏まえ、牛飼いがどのような気持ちでこの物語を語ったのか考えている。

第6時

学習の流れ

- 1 グループに分かれて感想や意見を発表し交流する。
- 2 各自、自分の感想文をまとめる。

《評価》

- ・作品の展開や表現の特徴について理解している。
- ・自分なりの感想や意見をもっている。

第7時

学習の流れ

- 1 自分の感想をクラスの前で発表する。
- 2 クラスメートの感想を聞いて、自分の読みを深める。

《評価》

- ・自分の読みをクラスの前で述べている。
- ・読みの交流によって自分の読みを深めている。

E 学習指導要領

本論文では、扱った教材の該当学年における目標を掲載し、明記されているものを補足しつつ掲載する（学校図書版「やまなし」、教育出版版「雪わたり」には具体的な記号表記が確認できなかったため、上記の資料を参照していただきたい）。以下は小学五年および六年の目標の引用である。

E-a『小学校学習指導要領解説 国語編』文部科学省 東洋館出版社  
行 2008

## 「A 話すこと・聞くこと」

### (1) 目標

目的や意図に応じ、考えたことや伝えたいことなどについて、的確に話す能力、相手の意図をつかみながら聞く能力、計画的に話し合う能力を身につけさせるとともに、適切に話したり聞いたりしようとする態度を育てる。

### (2) 内容

#### ① 指導事項

(1) 話すこと・聞くことの能力を育てるため、次の事項について指導する。

ア 考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、収集した知識や情報に関係付けること。

イ 目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。

ウ 共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと。

エ 話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること。

オ 互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。

## ②言語活動例

(2)(1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 資料を提示しながら説明や報告をしたり、それらを聞いて助言や提案をしたりすること。

イ 調べたことやまとめたことについて、討論などを行うこと。

ウ 事物や人物を推薦したり、それを聞いたりすること。

## 「B書くこと」

### (1)目標

(2)目的や意図に応じ、考えたことなどを文章全体の構成の効果を考へて文章に書く能力を身につけさせるとともに、適切に書こうとする態度を育てる。

### (2)内容

#### ①指導事項

(1)書くことの能力を育てるため、次の事項について指導する。

ア 考えたことなどから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理すること。

イ 自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考えること。

ウ 事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。

エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書くこと。

オ 表現の効果などについて確かめたり工夫したりすること。

カ 書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと。

## ②言語活動例

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 経験したこと、想像したことなどを基に、詩や短歌、俳句をつくったり、物語や随筆などを書いたりすること。

イ 自分の課題について調べ、意見を記述した文章や活動を報告した文章などを書いたり編集したりすること。

ウ 事物のよさを多くの人に伝えるための文章を書くこと。

## 「C読むこと」

### (1)目標

(3) 目的に応じ、内容や容姿をとらえながら読む能力を身につけせるとともに、読書を通して考えを広めたり深めたりしようとする態度を育てる。

### (2)内容

### ① 指導事項

(1) 読むことの能力を育てるため、次の事項について指導する。

ア 自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。

イ 目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること。

ウ 目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分お考えを明確にしながら読んだりすること。

エ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。

オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。

カ 目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むこと。

### ② 言語活動例

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 伝記を読み、自分の生き方について考えること。

イ 自分の課題を解決するために、意見を述べた文章や解説の文章などを利用すること。

ウ 編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと。

エ 本を読んで推薦の文章を書くこと。

### 「伝統的言語文化と国語の特質に関する事項」

(1) 「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」及び「C 読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

ア 伝統的な言語文化に関する事項（採用している項目がないため割愛）

イ 言葉の特徴やきまりに関する事項

言葉の働きや特徴に関する事項

（ア）話し言葉と書き言葉との違いに気づくこと。

（イ）時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気づくこと。

（ウ）送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。

（エ）語句の構成、変化などについての理解を深め、また、語句の由来などに関心をもつこと。

（オ）文章の中での国と国との関係を理解すること。

（カ）五感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと。

（キ）文や文章にはいろいろな構成があることについて理解すること。

（ク）日常よく使われる敬語の使い方慣れること。

（ケ）比喻や反復などの表現の工夫に気付くこと。

光村図書版「やまなし」 A(1)アイエ、伝国(1)イ(カ)(キ)(ケ)

東京書籍版「注文の多い料理店」 C(1)エオ B(1)ウ 伝国(1)イ(ケ)

学校図書版「注文の多い料理店」 Cエオカ Aアイエ Bアイウ

三省堂版「雪わたり」 Cイオ 伝国(1)イ(カ)(ケ)、言語活動例 Cエ

他は具体的な記号番号による記述はなかった。

本論文では、中学校第一学年の目標とその内容について掲載する。

「A 話すこと・聞くこと」

(1) 目標

(1) 目的や場面に応じ、日常生活に関わることなどについて構成を工夫して話す能力、話し手の意図を考えながら聞く能力、話題や方向をとらえて話し合う能力を身に付けさせるとともに、話したり聞いたりして考えをまとめようとする態度を育てる。

(2) 内容

① 指導事項

(1) 話すこと・聞くことの能力を育成するため、次の事項について指導する。

ア 日常生活の中から話題を決め、話したり話し合ったりするための材料を人との交流を通して集め整理すること。

イ 全体と部分、事実と意見との関係に注意して話を構成し、相手の反応を踏まえながら話すこと。

ウ じやなす速度や音量、言葉の調子や間の取り方、相手に分かりやすい語句の選択、相手や場に応じた言葉遣いなどについての知識を生かして話すこと。

エ 必要に応じて質問しながら聞き取り、自分の考えとの共通点や相違点を整理すること。

オ 話合いの話題や方向をとらえて的確に話したり、相手の発言を注意して聞いたりして、自分の考えをまとめること。

## ②言語活動例

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 日常生活の中の話題について報告や紹介をしたり、それらを聞いて質問や助言をしたりすること。

イ 日常生活の中の話題について対話や討論などを行うこと。

## 「B書くこと」

### (1)目標

(2) 目的や意図に応じ、日常生活に関わることなどについて、構成を考えて的確に書く能力を身に付けさせるとともに、進んで文章を書いて考えをまとめようとする能力を育てる。

### (2)内容

#### ①指導事項

(1) 書くことの能力を育成するため、次の事項について指導する。

ア 日常生活の中から課題を決め、材料を集めながら自分の考えをまとめること。

イ 集めた材料を分類するなどして整理するとともに、段落の役割を考えて文章を構成すること。

ウ 伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くこと。

エ 書いた文章を読み返し、表記や語句の用法、叙述の仕方など

を確かめて、読みやすくわかりやすい文章にすること。

オ 書いた文章を互いに読み合い、題材の捉え方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりすること。

## ② 言語活動例

(2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 関心のある芸術的な作品などについて、鑑賞したことを文章に書くこと。

イ 図表などを用いた説明や記録の文章を書くこと。

ウ 行事等の案内や報告をする文章を書くこと。

## 「C読むこと」

### (1) 目標

(3) 目的や意図に応じ、様々な本や文章などを読み、内容や要旨を的確にとらえる能力を身に付けさせるとともに、読書を通して物の見方や考え方を広げようとする態度を育てる。

### (2) 内容

#### ① 指導事項

(1) 読むことの能力を育成するため、次の事項について指導する。

ア 文脈の中における語句の意味を的確にとらえ、理解すること。

イ 文章の中心的部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること。

ウ 場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理

解に役立てること。

エ 文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広くすること。

カ 本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身につけ、目的に応じて必要な情報を読み取ること。

## ②言語活動例

(2)(1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 様々な種類の文章を音読したり朗読したりすること。

イ 文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読むこと。

ウ 課題に沿って本を読み、必要に応じて引用して紹介すること。

## 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」

ア 伝統的な言語文化に関する事項（採用している項目がないため割愛）

イ （ア）音声の働きや仕組みについて関心をもち、理解を深めるところ。

（イ）語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意し、語感を磨くこと。

（ウ）事象や行為などを表す多様な語句について理解を深めるとともに、話や文章の中の語彙について関心をもちこと。

（エ）単語の類別について理解し、指示語や接続詞及びこれらと同じような働きをもつ語句などに注意すること。

（オ）比喩や反復などの表現の技法について理解すること。

教育出版版「オツベルと象」C(1)エ。また、『伝え合う言葉 中学国語  
1 教師用指導書 教材研究編 上』(教育出版 2016)内にて、当教材  
の擬態語・擬声語の理解は、伝国(1)イ(ア)とも深く関連するとの記述  
があった。

その他教材は小学校版同様具体的な記述なし。

参考・引用文献

- 「やまなし」『国語 6 創造』光村図書 2015
- 「やまなし」『学習指導書別冊 国語 6 創造』光村図書 2015
- 「やまなし」『みんなと学ぶ小学校国語 五年 上 教師用指導書 朱書編』学校図書 2015
- 「イーハトーヴの夢」『国語 6 創造』光村図書 2015
- 「やまなし」『みんなと学ぶ小学校国語 五年 上』学校図書 2015
- 「注文の多い料理店」『みんなと学ぶ小学校国語 五年 上』学校図書 2015
- 「注文の多い料理店」『みんなと学ぶ小学校国語 五年 上 教師用指導書 朱書編』学校図書 2015
- 「注文の多い料理店」『みんなと学ぶ小学校国語 五年 上 教師用指導書解説編』学校図書 2011
- 「注文の多い料理店」『新編 新しい国語 五』東京書籍 2015
- 「注文の多い料理店」『新編 新しい国語 五 教師用指導書 研究編』東京書籍 2015
- 「雪わたり」『小学生の国語 6年 学習指導書 朱書編』三省堂 2015
- 「雪わたり」『小学生の国語 6年 学習指導書②』三省堂 2011
- 「雪わたり」『ひろがる言葉 小学国語 5 下 教師用指導書 別冊（朱書編）』教育出版 2015
- 「雪わたり」『ひろがる言葉 小学国語 5 下 教師用指導書 解説・展開編』教育出版 2011
- 「注文の多い料理店」『現代の国語 1』三省堂 2016
- 「注文の多い料理店」『現代の国語 1 教科書研究と学習指導「資料編」』

- 三省堂 2016
- 「オツベルと象」『伝え合う言葉 中学国語 1』教育出版 2016
- 「オツベルと象」『伝え合う言葉 中学国語1 教師用指導書 教材研究 編 上』教育出版 2016
- 外館克裕「『やまなし』アンケート単純集計・考察（第一次）―作品解釈の多様性を中心に―」『国語教育研究岩手』日本国語教育学会岩手支部会 1991/06
- 恩田逸夫「賢治童話の読み方―『やまなし』を中心に―」『解釈』解釈学会 1971/03
- 関口安義「やまなし（初期系）―寓意を読む」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 2009/06
- 岩田英作「宮沢賢治『やまなし』の授業化とその意義」『国語教育論集』島根大学教育学部国文学会 2016/02
- 安藤恭子「注文の多い料理店・再構造化の戦略」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 2009/06
- 友田義行「山猫たちの経営戦略・宮澤賢治「注文の多い料理店」論」『信大国語教育』信大国語教育学会 2014/03
- 阿部藤子「「部分の読み」と「全体を俯瞰する読み」に書くことを生かす(2)―「注文の多い料理店」の実践から―」『全国大学教育発表要旨集』全国大学国語教育学会 2014/11
- 藤田晴央「宮澤賢治、異界への入り込み―『雪わたり』におけるわらべ歌の力」『東北女子大学紀要』東北女子短期大学紀要編集委員会 2017/02
- 高橋幸紀「「雪渡り」の授業を考える」『国語論集』北海道教育大学 2015/03

- 日置俊次「宮澤賢治論―「雪渡り」から「やまなし」へ―」『青山語文』  
青山学院大学日本文学会 2015/03
- 中野登志美「宮澤賢治「オツベルと象」の教材性の検討―言葉の二重性  
という観点から―」『広島大学大学院教育学研究科紀要』広島大学大学院  
教育学研究科 2012
- 小林俊子「オツベルと象―発表された物語」『国文学 解釈と鑑賞』至文  
堂 2009/06
- 荻原桂子「文学教材の研究―宮澤賢治『オツベルと象』（中学校一年）の  
言語表現―」『九州女子大学紀要』九州女子大学 2013
- 『小学校学習指導要領解説 国語編』文部科学省 東洋館出版社発行  
2008
- 『中学校学習指導要領解説 国語編』文部科学省 東洋館出版社発行  
2008
- 須貝千里、田中実『これからの文学教育のゆくえ』右文書院 2005